

平安京左京四条四坊一町跡・烏丸御池遺跡

2020年

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

平安京左京四条四坊一町跡・烏丸御池遺跡

2020年

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

京都市内には、いにしへの都平安京をはじめとして、数多くの埋蔵文化財包蔵地（遺跡）が点在しています。平安京以前にさかのぼる遺跡及び平安京建都以来、今日に至るまで営々と生活が営まれ、各時代の生活跡が連綿と重なりあっています。このように地中に埋もれた埋蔵文化財（遺跡）は、過去の京都の姿をうかびあがらせてくれます。

公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、遺跡の発掘調査をとおして京都の歴史の解明に取り組んでいます。その調査成果を市民の皆様に広く公開し、活用していただけるよう努めていくことが責務と考えています。現地説明会の開催、写真展や遺跡めぐり、京都市考古資料館での展示公開、小中学校での出前授業、ホームページでの情報公開などを積極的に進めているところです。

このたび、建物新築工事に伴う平安京跡・烏丸御池遺跡の発掘調査について調査成果を報告いたします。本報告の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示賜りますようお願い申し上げます。

末尾になりましたが、当調査に際しまして多くのご協力とご支援を賜りました多くの関係各位に厚く感謝し、御礼を申し上げます。

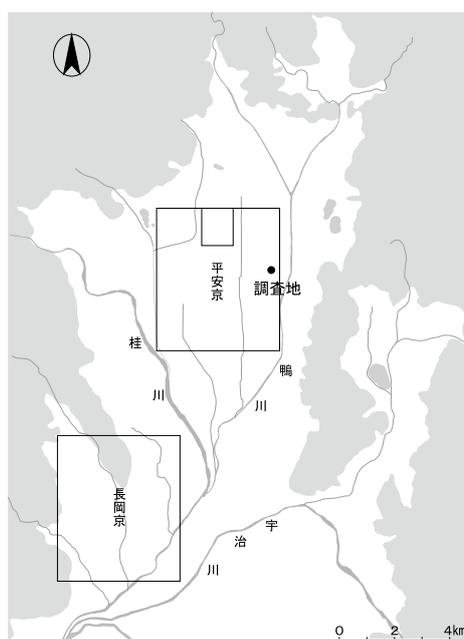
令和2年1月

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
所 長 井 上 満 郎

例 言

- | | |
|----------|---|
| 1 遺 跡 名 | 平安京跡・烏丸御池遺跡（京都市番号 18H172） |
| 2 調査所在地 | 京都市中京区高倉通三条下る丸屋町163番地 他 |
| 3 委 託 者 | 千切屋株式会社 代表取締役社長 高見 保 |
| 4 調査期間 | 2019年3月4日～2019年6月1日 |
| 5 調査面積 | 294.5㎡ |
| 6 調査担当者 | 松永修平・布川豊治 |
| 7 使用地図 | 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「三条大橋」を参考にし、作成した。 |
| 8 使用測地系 | 世界測地系 平面直角座標系Ⅵ（ただし、単位（m）を省略した） |
| 9 使用標高 | T.P.：東京湾平均海面高度 |
| 10 使用土色名 | 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。 |
| 11 遺構番号 | 通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。 |
| 12 遺物番号 | 通し番号を付し、写真番号も同一とした。 |
| 13 本書作成 | 松永修平 |
| 14 備 考 | 上記以外に調査・整理ならびに本書作成には、調査業務職員及び資料業務職員があたった。 |

(調査地点図)



目 次

1. 調査経過	1
2. 位置と環境	3
(1) 歴史的環境と立地	3
(2) 既往の調査	4
3. 遺 構	11
(1) 基本層序	11
(2) 平安時代中期の遺構（第5面）	11
(3) 平安時代後期の遺構（第4面）	14
(4) 鎌倉時代から室町時代の遺構（第3-2・3-1面）	16
(5) 室町時代後期から江戸時代前期の遺構（第2面）	18
(6) 江戸時代中期から末期の遺構（第1面）	18
4. 遺 物	22
(1) 遺物の概要	22
(2) 土器類	22
(3) 瓦類	27
(4) 金属製品	31
(5) 土製品	33
5. ま と め	34
(1) 高倉小路西側溝の変遷	34
(2) 門遺構について	35

図 版 目 次

図版1	遺構	第5面遺構平面図（平安時代中期、1：120）
図版2	遺構	第4面遺構平面図（平安時代後期、1：120）
図版3	遺構	第3-2面遺構平面図（鎌倉時代から室町時代、1：120）
図版4	遺構	第3-1面遺構平面図（室町時代、1：120）
図版5	遺構	第2面遺構平面図（室町時代後期から江戸時代前期、1：120）
図版6	遺構	第1面遺構平面図（江戸時代中期から末期、1：120）
図版7	遺構	堀4・5、門2・3実測図（1：80）

- 図版8 遺構 塀3、門1実測図（1：80）
- 図版9 遺構 塀2実測図（1：50）
- 図版10 遺構 石室1実測図（1：50）
- 図版11 遺構 石室2実測図（1：50）
- 図版12 遺構 地下室5実測図（1：50）
- 図版13 遺構 1 第5面全景（西から）
2 第4面全景（西から）
- 図版14 遺構 1 溝261、塀4・5、門2・3（北西から）
2 門2・3完掘状況（北から）
3 溝261土師器片埋没状況（北から）
4 拡張部北壁（南から）
- 図版15 遺構 1 第3面全景（北西から）
2 門1（南東から）
3 布掘り基礎211（西から）
- 図版16 遺構 1 第2面全景（北西から）
2 堀108検出状況（南西から）
3 タタキ1（西から）
- 図版17 遺構 1 第1面全景（北西から）
2 石室2（東から）
3 地下室5（北から）
- 図版18 遺物 出土土器類
- 図版19 遺物 出土瓦類
- 図版20 遺物 1 出土銭貨
2 出土埴塼
3 溝261出土動物骨

挿 図 目 次

図1	調査位置図（1：2,500）	1
図2	調査区配置図（1：500）	2
図3	調査前全景（南から）	2
図4	作業状況（北西から）	2
図5	戦国期の京都市街図（『京都中世都市研究』図30より抜粋加筆）	3

図6	周辺調査位置図（1：5,000）	4
図7	調査区東壁断面図（1：50）	12
図8	調査区南壁断面図（1：50）	13
図9	建物1実測図（1：80）	14
図10	柱穴列6実測図（1：50）	15
図11	拡張部北壁断面図（1：50）	15
図12	土取り土坑群断面図（1：50）	16
図13	布掘基礎211実測図（1：80）	17
図14	井戸301実測図（1：50）	18
図15	石室1（南から）	19
図16	柱穴列1実測図（1：60）	19
図17	竈29、集石土坑15・31・40、井戸55実測図（1：50、竈29のみ1：40）	20
図18	出土土器実測図1（1：4）	24
図19	出土土器実測図2（1：4）	26
図20	軒丸瓦・鳥衾拓影及び実測図（1：4）	28
図21	軒平瓦・その他の瓦拓影及び実測図（1：4）	30
図22	金属製品実測図（1：2）	31
図23	銭貨拓影（1：1）	32
図24	土製品実測図（1：4、6のみ1：8）	33
図25	平安時代後期と室町時代の門と塀（1：1,000）	35

表 目 次

表1	周辺調査一覧表	6
表2	遺構概要表	11
表3	遺物概要表	22
表4	銭貨一覧表	32
表5	平安時代と室町時代の門一覧表	36

平安京左京四條四坊一町跡・烏丸御池遺跡

1. 調査経過

調査は、千切屋株式会社社屋新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査である。調査に先立ち、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下「文化財保護課」という）が試掘調査を行った。結果、平安時代から江戸時代までの重層する遺構面が確認された。これを受けて工事に先立ち、文化財保護課の指導のもと公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所が埋蔵文化財調査を行うこととなった。

調査地は、京都市中京区高倉通三条下丸屋町163番地他で、三条通の南側、高倉通に西接する場所に位置する。平安京の条坊では左京四條四坊一町跡の東端部にあたり、また、縄文時代晩期から古墳時代にかけての集落遺跡である烏丸御池遺跡の範囲にも含まれている。

調査区は、千切屋株式会社の敷地の東端に位置し、東西15.5m、南北19mの294.5㎡である。

2019年3月4日に電気工事・水道工事などの付帯工事を行い、翌日3月5日から重機による表土の掘削を開始した。遺構の検出や掘削は人力による掘り下げを行ったが、第3面で検出した鎌倉時代・室町時代の土取り土坑が広範囲かつ深いことを確認し、遺物も細片が多いと認めたため、この部分は重機によって掘り下げを行った。検出した遺構は、実測や写真撮影・オルソ測量などの記録作業を行った。5月30日から6月1日には埋め戻しを行い現状復旧して、調査を終了した。なお、埋め戻しの際に、高倉小路の詳細を明らかにする目的で調査区北東部を東西1.5m、南北2mの

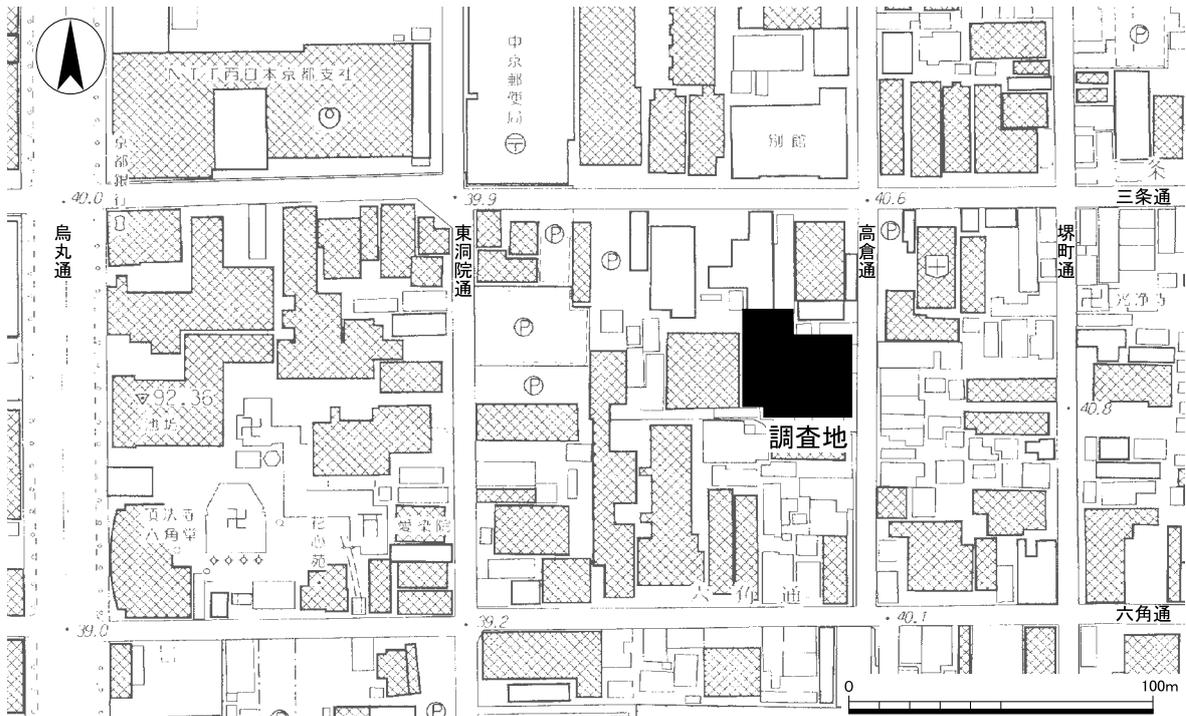


図1 調査位置図（1：2,500）

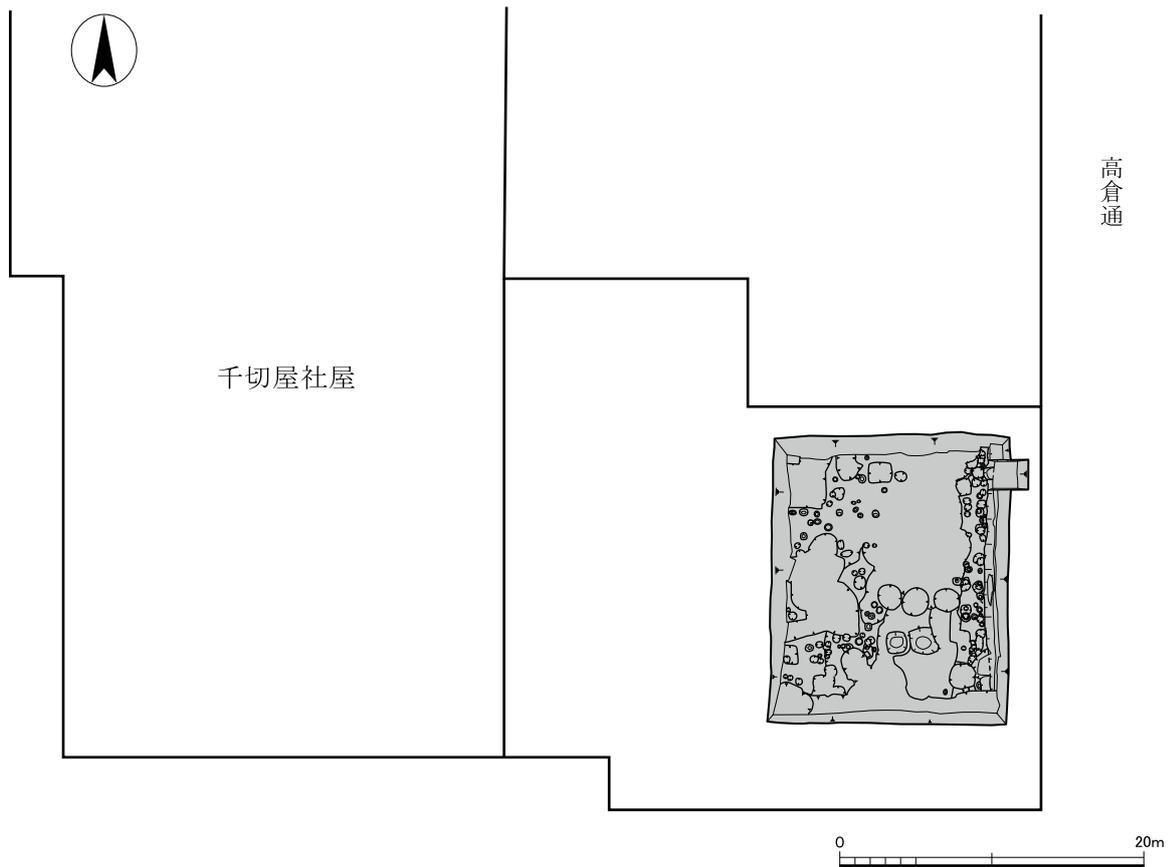


図2 調査区配置図（1：500）

範囲で拡張し調査を行った。調査中は、適宜、文化財保護課の臨検を受けた。

調査の結果、平安時代の高倉小路の西側溝とこれに並列する塀と門、室町時代の塀と門、室町時代後期から安土桃山時代の下京惣構の堀、江戸時代の石室・埧塙を壁材とした地下室・井戸などを検出した。なお拡張部の調査により、高倉小路西側溝の規模が把握できたのと同時に、第3面で検出した溝が下京惣構の堀であることが判明した。

また、5月25日には近隣住民に向けた地元説明会を行い、約90名の参加者を得た。



図3 調査前全景（南から）



図4 作業状況（北西から）

2. 位置と環境

(1) 歴史的環境と立地

調査地は、鴨川扇状地上に位置し、北東から南西に向かって緩やかに傾斜する地形に立地しており、弥生時代から古墳時代にかけての集落遺跡である烏丸御池遺跡が形成されている。

平安京への遷都に伴い、当地は北の三条大路、南の六角小路、東の高倉小路、西の東洞院大路に囲まれた左京四条四坊一町となる。この一町に関する文献資料の初出は、保元3年（1158）の東洞院通東・六角通北の藤原光忠の邸宅が火災により焼失したという記録である¹⁾。ただし、この時の光忠の位階は正四位であり²⁾、1町規模の宅地を所有していたかは定かではなく、当地が光忠の屋敷地の範囲に含まれたかどうか不明である。また、北隣の三条四坊四町は、平安時代末に後白河天皇の皇子である以仁王とその妹の式子内親王が住んでいた高倉宮跡の推定地であり、室町時代以降は尼門跡寺院瑞雲山通玄寺曇華院が営まれていた。東隣の四条四坊八町には待賢門院御所が存在していた。また、東洞院通（三条から六角間）近辺には鎌倉幕府京都守護の平賀朝雅の宿所があったと考えられる³⁾。

室町時代後期の応仁・文明の乱（1467～1477年）以後、京都の市街地は縮小していき、「上京」と「下京」の二つの町が形成され、それぞれ「上京惣構」・「下京惣構」により圍繞されていた。下京惣構は、北は二条大路、西は堀川小路、南は樋口小路、東は高倉小路付近までと考えられており、当地は下京惣構の南北中央の東限付近に推定される⁴⁾（図5）。

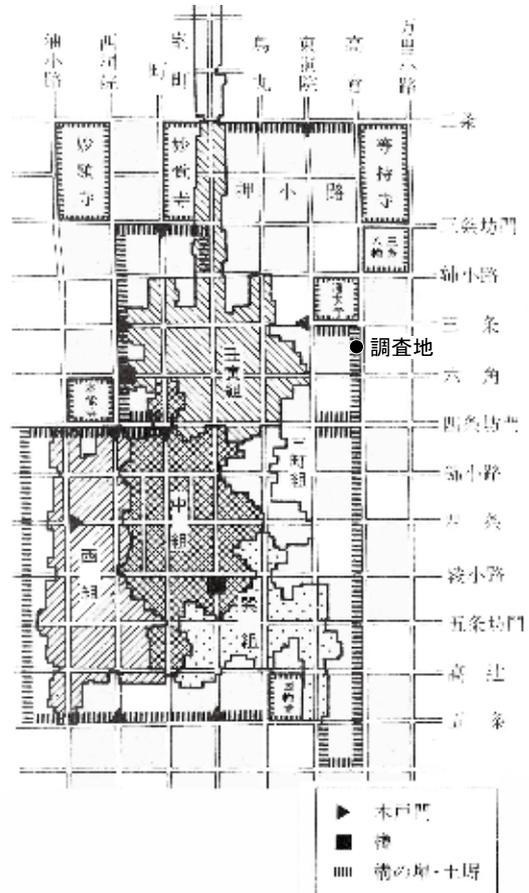


図5 戦国期の京都市街図
（『京都中世都市研究』図30より抜粋加筆）

註

- 1) 『山槐記』保元三年七月二日条
- 2) 『公卿補任』後白河（保元三年）条
- 3) 『吾妻鏡』正治三年（建仁元年）二月三日・元久二年閏七月二六日条
- 4) 高橋康夫『京都中世都市研究』思文閣出版 1983年

(2) 既往の調査 (図6、表1)

ここでは調査地周辺の左京四条四坊、四条三坊東部 (十三～十六町)、三条四坊南部 (四・五・十二・十三町) で実施された主要な調査の概要について条坊ごとに述べる。

四条四坊

一町 1978年の発掘調査 (図6-1、表1、以下図・表番号略) では、室町時代の井戸、江戸時代の井戸を検出した。1993年の立会調査 (2) では、古墳時代前期の土器を含む流路、室町時代の包含層・土坑を検出した。1996年の立会調査 (3) では、弥生時代の南北方向の流路、平安時代中期・鎌倉時代・江戸時代の土坑などを検出した。

二町 1990～91年の発掘調査 (4) では、縄文時代晩期から飛鳥時代の遺物が出土した流路、平安時代中・後期の区画溝・井戸・土坑、江戸時代前期の溝・土坑を検出した。1993年の発掘調査 (5) では、平安時代後期から鎌倉時代の区画溝・井戸・土坑、室町時代の建物・礎敷遺構・柱穴、

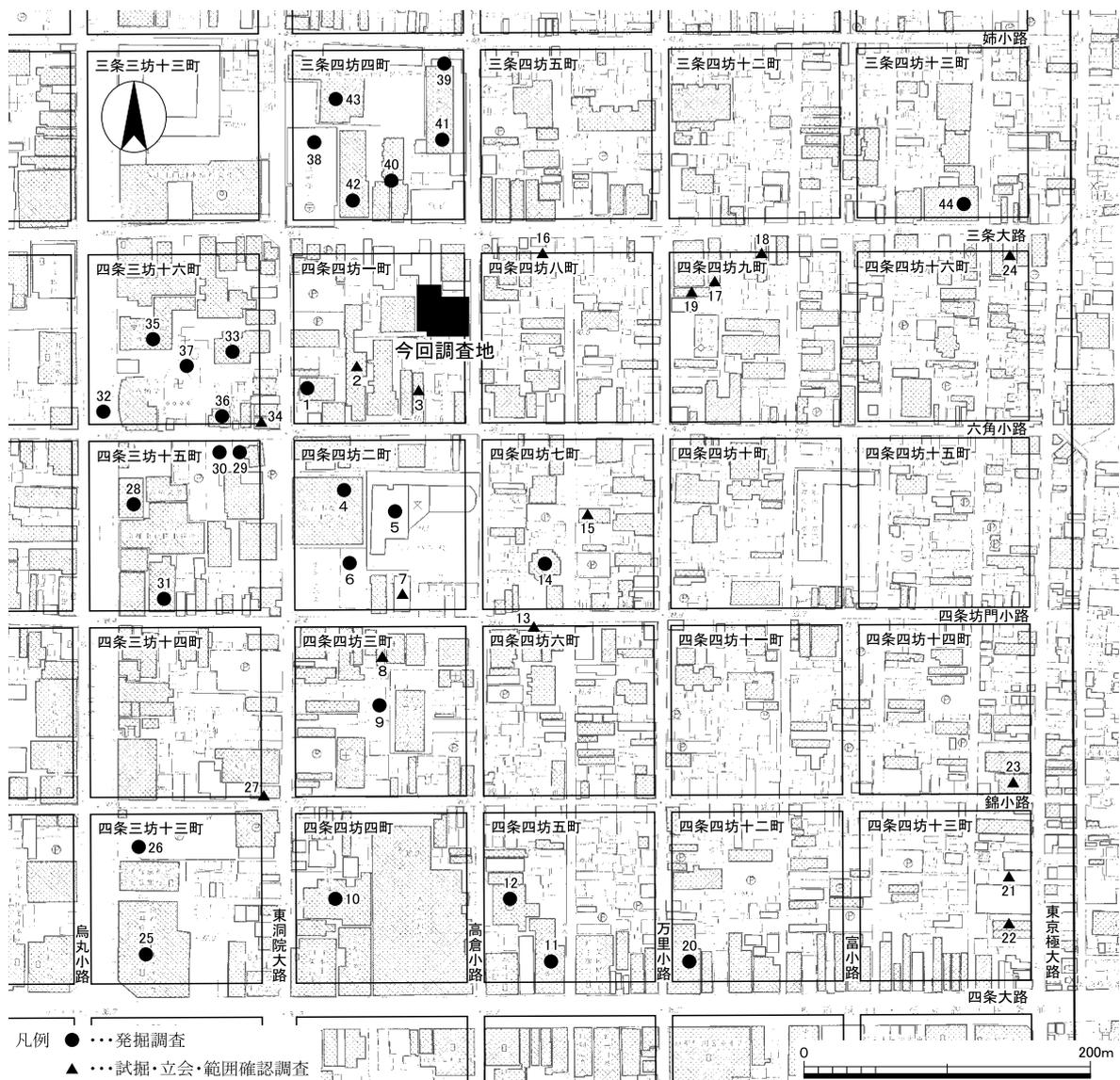


図6 周辺調査位置図 (1 : 5,000)

安土桃山時代から江戸時代の柵・建物・井戸・土坑・石室などを検出した。2008年の調査(6)では平安時代の井戸、鎌倉時代から室町時代にかけての井戸・地下室・溝・土取り穴、江戸時代の井戸・溝などを検出した。2015年の試掘調査(7)では、平安時代末期に埋没した四条坊門小路北側溝を検出した。

三町 1991年の立会調査(8)では、飛鳥時代の流路の西肩口を検出した。2007年の発掘調査(9)では、弥生時代の竪穴建物・流路・土坑、室町時代の堀・石組井戸・溝・建物・柵・土取り穴、江戸時代中期から後期の掘立柱建物・土坑を検出した。

四町 1991年の発掘調査(10)では、弥生時代の溝、中世の土坑墓、江戸時代初期の鏡鑄造工房を検出した。

五町 1986年の発掘調査(11)では、平安時代前期から後期の土坑・柱穴・落込、鎌倉時代から室町時代の井戸・土坑・柱穴、江戸時代の井戸・土坑・掘込を検出した。1989年の発掘調査(12)では、古墳時代の流路、平安時代前期の整地層・土坑、平安時代末期から鎌倉時代の井戸・土坑・柱穴、安土桃山時代から江戸時代の井戸・土坑・土取穴・溝・柱穴・石室・木棺墓が検出された。

六町 2002年の立会調査(13)では、古墳時代前期および鎌倉時代中期の包含層を検出した。

七町 1987年の発掘調査(14)では、弥生時代後期から古墳時代初頭の溝、古墳時代の柱穴、平安時代中期の土坑・柱穴・溝状遺構、平安時代後期から鎌倉時代の土坑、室町時代の井戸・土坑、安土桃山時代から江戸時代前期の井戸・土坑、江戸時代中期以降の井戸を検出した。1996年の立会調査(15)では、弥生時代の遺物が出土している。

八町 2014年に行われた詳細分布調査(16)で、平安時代中期の三条大路の路面を検出した。

九町 1989年の立会調査(17)では、江戸時代初期の井戸から茶陶を含む陶磁器が大量に出土した。1993年の立会調査でも同様に茶陶が大量に出土した(18)。2007年の試掘調査では江戸時代前期の土師器や播鉢に混じりわずかながら茶陶が出土している(19)。

十二町 2000年の発掘調査(20)では、平安時代中期から後期の湿地・井戸・溝・建物・四条大路北側溝、鎌倉時代から室町時代前期の方形竪穴建物・土坑・柱穴、室町時代中期から安土桃山時代の井戸・土坑・溝・柱穴を検出した。

十三町 1982年の試掘調査(21)では、東京極大路の路面を検出した。1995年の試掘調査(22)では、平安時代末から鎌倉時代の土坑・柱穴・東京極大路などを検出した。

十四町 1987年の試掘調査(23)では、平安時代の溝・東京極大路の西側溝などを検出した。

十六町 1990年の試掘調査(24)では、古墳時代の遺物を包含する流路や東京極大路の路面を検出した。

四条三坊

十三町 1982年の発掘調査(25)では、弥生時代の溝・建物跡、平安時代から江戸時代の井戸・土坑・溝などを検出し、石器を含む弥生時代の遺物が大量に出土した。1989～90年の発掘調査(26)では、弥生時代の溝・落込、平安時代の井戸・土坑・溝・柱穴、鎌倉時代から室町時代後半の石組井戸・礎石・溝・柱穴・落込、安土桃山時代以降の井戸・石室・土坑・溝状遺構・石組遺

表1 周辺調査一覧表

左京四条四坊

番号	条坊	調査年度	調査内容	調査団体	調査地	調査面積(m ²)	主な成果					
							平安京造営前	平安時代	鎌倉時代	室町時代	安土桃山時代	江戸時代
1		1978	発掘	埋文研	中京区東洞院通三条下る三文字町217	145				井戸		井戸
2	一町	1993	立会	市保護課	中京区六角通東洞院東入藤屋町191他	-	流路(古墳時代)			土坑		
3		1996	立会	市保護課	中京区六角通東洞院東入藤屋町183-1・9・10	-	流路(弥生時代)	土坑	土坑			土坑
4		1990～1991	発掘	埋文研	中京区東洞院通六角下る御射山町272	703	流路(古墳時代)	溝、井戸		つくばい		井戸
5	二町	1993	発掘	埋文研	中京区高倉通六角下る和久屋町343(高倉小学校)	871		溝、井戸		建物、溝、礎敷遺構	建物、井戸、石室、溝、路地	
6		2008	発掘	埋文研	中京区東洞院通蛸薬師上る御射山町265(御射山公園)	838		井戸	井戸、地下室	甕掘付穴、井戸、集石土坑		土蔵、甕掘付穴、石室、井戸
7		2015	試掘	市保護課	中京区蛸薬師通東洞院東入泉正寺町327他	93		四条坊門小路北側溝				
8	三町	1991	立会	市保護課	中京区蛸薬師通東洞院東入泉正寺町326他	-	流路(飛鳥時代)					
9		2006	発掘	埋文研	中京区蛸薬師通東洞院東入泉正寺町320、西魚屋町612-1など	441	堅穴建物、流路(弥生時代)			堀、石組井戸、溝、建物など		掘立柱建物など
10	四町	1991	発掘	京都文化博物館	中京区東洞院通錦小路下る阪東屋町661他	約720	溝(弥生時代)		土墳墓			鏡製造工房
11	五町	1986	発掘	埋文研	下京区四条通柳馬場西入立売中之町90-2	415		柱穴、落込など	井戸、柱穴など			井戸、掘込など
12		1989	発掘	埋文研	中京区高倉通四条上る帯屋町582	235	流路(古墳時代)	整地層、土坑	井戸、柱穴など		井戸、溝、柱穴、石室、木棺墓	
13	六町	2002	立会	市保護課	中京区堺町通蛸薬師下る菊屋町514	-	包含層(古墳時代)		包含層			
14	七町	1986	発掘	埋文研	中京区堺町通六角下る甲屋町394	216	溝(弥生時代)	区画溝		井戸	井戸、土坑	
15		1996	立会	市保護課	中京区堺町通六角下る甲屋町386-5他	-	遺物を採集					
16	八町	2014	詳細分布	市保護課	中京区三条通高倉東入枳屋町61他	-		三条大路路面				
17		1989	立会	市保護課	中京区三条通柳馬場東入中之町9	-						井戸
18	九町	1993	立会	市保護課	中京区三条通柳馬場東入中之町19	-						落込
19		2007	試掘	市保護課	中京区柳馬場通三条下る樋屋町84-2	28						廃棄土坑
20	十二町	2000	発掘	埋文研	下京区四条通麩屋町西入立売東町1	490		湿地、井戸、溝、建物、四条大路北側溝	方形堅穴建物、柱穴など	井戸、溝、柱穴など		
21	十三町	1982	試掘	市保護課	中京区寺町通錦小路下る東大文字町300	-		東京極大路路面				
22		1995	試掘	市保護課	中京区寺町通錦小路下る東大文字町301	-		東京極大路西側溝など				
23	十四町	1987	試掘	市保護課	中京区寺町通錦小路上る西側円福寺前町283、284他	-		溝、東京極大路西側溝など				
24	十六町	1990	試掘	市保護課	中京区寺町通三条下る西側永楽町他	-	流路(古墳時代)	東京極大路路面				

左京四三条坊東部

番号	条坊	調査年度	調査内容	調査団体	調査地	調査面積(m ²)	主な成果					
							平安京造営前	平安時代	鎌倉時代	室町時代	安土桃山時代	江戸時代
25	十三町	1982	発掘	古代学協会	下京区四条通烏丸東入長刀鉾町	1700	建物跡、溝(弥生時代)	井戸、土坑、溝				
26		1989～1990	発掘	埋文研	中京区錦小路通烏丸東入元法然寺町684他	1755	落込、溝(弥生時代)	井戸、溝、柱穴など	井戸、土坑	石組井戸、礎石、溝、柱穴、落込	井戸、石室、土坑、溝状遺構、石組遺構、便所埋甕、水琴窟など	
		1990	試掘	埋文研	中京区東洞院通六角下る御射山町272	-	溝(弥生時代、古墳時代)					
27	十四町	1983	立会	市保護課	中京区新京極通蛸薬師下る東側町513-1	-		流路				
28	十五町	1977	発掘	埋文研	中京区烏丸通六角下る七観音町628他	295		掘立柱建物、井戸		土坑		
29		1978	発掘	埋文研	中京区六角通東洞院西入堂之前町236	75		井戸	柱穴		井戸、区画溝	
30		1978	発掘	埋文研	中京区東洞院通三条下る三文字町205	432		井戸		六角堂関連の門、堀、池	六角堂東限の堀	
31		1979	発掘	埋文研	中京区蛸薬師通烏丸東入一蓮社町293	80		四条坊門小路北側溝	柱穴、溝		柱穴	
32		1977	発掘	烏丸線内遺跡調査会	中京区烏丸通六角上る饅頭屋町・七観音町	80		六角小路路面・北側溝	溝、土坑	井戸、溝、土坑	井戸、礎石	井戸、土坑
33	1986	発掘	埋文研	中京区六角通東洞院東入堂ノ前町236	75	溝(弥生時代)	溝、地鎮				井戸	
34	1992	立会	市保護課	中京区三条通麩屋町東入弁慶石町40	-		土坑、包含層	土坑、包含層				
35	十六町	1986	発掘	埋文研	六角堂境内(中京区東洞院通三条下る三文字町205)	約431		井戸		六角堂東限の堀・門、池	六角堂東限の堀、塵芥処理土坑	
36	1992	発掘	古代学協会	六角堂境内	60		井戸		土坑		石室	
37	1994	発掘	古代学協会	六角堂境内	約800	流路	井戸	井戸	溝		太子堂関連の池・参道・橋、堀、井戸	
	1996	発掘	古代学協会	六角堂境内	約500		溝	土坑	堀、溝		石列	

左京三条坊南部

番号	条坊	調査年度	調査内容	調査団体	調査地	調査面積(m ²)	主な成果					
							平安京造営前	平安時代	鎌倉時代	室町時代	安土桃山時代	江戸時代
38	四町	1977	発掘	古代学協会	中京区三条通東洞院東入菱屋町30	約600		東洞院大路東側溝				
39		1979	発掘	古代学協会	中京区東洞院通三条上る曇華院前之町760-1	約1500		高倉小路西側溝			石垣	
40		1983	発掘	古代学協会	中京区東洞院通三条上る曇華院前之町706-2	約700			遺物を採集			
41		1986	発掘	古代学協会	中京区高倉通姉小路下る東片町623他	約1900		高倉小路西側溝、井戸		井戸、石室		火災処理土坑
42		1987	発掘	京都文化財団	中京区三条通東洞院東入曇華院前之町705-1他	約1200	縄文時代晩期の突帯文土器など	井戸、築地・犬行		築地(掘立柱)、三条大路北側溝		石垣、地業、池状遺構
43		2001	発掘	埋文研	中京区姉小路通東洞院東入曇華院前町	約980		井戸	井戸	井戸、溝		
44	十三町	1987	発掘	埋文研	中京区三条通麩屋町東入弁慶石町48	300		三条大路路面、門、三条大路北築地内溝	三条大路路面、門		三条大路・北側溝、町屋敷、茶陶出土土坑	

※ 埋文研：財団法人・公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所、市保護課：京都市文化観光局・京都市文化市民局文化芸術都市推進室 文化財保護課

構・便所の埋甕・水琴窟などを検出した。1990年の試掘調査（同26）では、弥生時代・古墳時代の溝、鎌倉時代から室町時代にかけての遺構を多数検出した。

十四町 1983年の立会調査（27）では、平安時代の流路を確認した。

十五町 1977年の発掘調査（28）では、平安時代の井戸・土坑、鎌倉時代の井戸・土坑、室町時代の建物・井戸・土坑などを検出した。1978年の発掘調査（29・30）では、平安時代の井戸・柱穴、中世の土坑・柱穴、近世の井戸・土坑・溝・石室などを検出した。1979年の発掘調査（31）では、平安時代の四条坊門小路北側溝、中世の土坑・溝・柱穴、近世の瓦溜などを検出した。

十六町 1977年の京都市高速鉄道烏丸線（地下鉄烏丸線）の発掘調査（32）では、六角小路の路面と北側溝を検出した。この路面と溝は、平安時代後期以前と考えられるが出土遺物が細片で詳細な時期は不明である。1986年の発掘調査（33）では、平安時代後期の井戸・土坑・柱穴、鎌倉時代の柱穴、室町時代の柱穴列・落込など、江戸時代の井戸・土坑・溝・堀込・落込・柱穴列を検出した。1992年度の立会調査（34）では室町時代後期の南北方向の堀と東洞院大路の路面を検出した。

また、十六町内には六角堂があり、これに関連した発掘調査も行われている。1次調査（35）では、平安時代の井戸、室町時代の六角堂の東限の堀・門・池、江戸時代の六角堂の東限の堀などを検出した。2次調査（36）では、平安時代の井戸、江戸時代の石室などを検出した。3次調査（37）では、平安時代の井戸、鎌倉時代の井戸、室町時代の溝、江戸時代の太子堂に関連する遺構（池・参道・橋）、堀・井戸などを検出した。4次調査（同37）では、室町時代後期から江戸時代前期の堀、江戸時代の石列などを検出した。

三条四坊

四町 ここには高倉宮・曇華院が存在していた。1977年の発掘調査では、東洞院大路の東側溝と考えられる溝を検出した（38）。1979年に行われた発掘調査（39）では、平安時代の高倉小路の西側溝と江戸時代の石垣を検出した。1983年に行われた発掘調査（40）では、遺構は江戸時代の遺構に削平されており、中世以前の遺構は確認できていない。1986年の発掘調査では、平安時代の高倉小路の路面及び西側溝、室町時代の石室などを検出している（41）。翌1987年には、平安時代の井戸・築地・犬行、室町時代の築地・三条大路北側溝、江戸時代の石垣・地業・池状遺構を検出している（42）。2001年の発掘調査では、平安時代、室町時代、江戸時代各時期の井戸を検出している（43）。

十三町 1987年の発掘調査では、平安時代から江戸時代の三条大路路面、平安時代後期の三条大路北築地内溝・門、鎌倉時代から室町時代の門・三条大路北築地内溝・埋甕、安土桃山時代から江戸時代の三条大路北側溝・井戸・方形石室・土坑などから構成される町屋敷・茶陶出土土坑などを検出している（44）。

参考文献

左京四条四坊

- 1 「平安京左京四条四坊一町」『昭和53年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2011年
- 2 『京都市内遺跡立会調査概報 平成5年度』 京都市文化観光局 1994年
- 3 『京都市内遺跡立会調査概報 平成8年度』 京都市文化観光局 1997年
- 4 山本雅和「平安京左京四条四坊」『平成2年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1994年
- 5 山本雅和・鈴木廣司「平安京左京四条四坊」『平成5年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1996年
- 6 山本雅和『平安京左京四条四坊二町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2008-12 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2009年
- 7 『京都市内遺跡試掘調査報告 平成27年度』 京都市文化市民局 2016年
- 8 竜子正彦「平安京左京四条四坊（91HL170）」『京都市内遺跡立会調査概報 平成3年度』 京都市文化観光局 1992年
- 9 伊藤 潔『平安京左京四条四坊三町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2006-28 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2007年
- 10 『平安京左京四条四坊』京都文化博物館調査研究報告第9集 京都府京都文化博物館 1993年
- 11 長戸満男「平安京左京四条四坊」『昭和60年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1988年
- 12 木下保明「平安京左京四条四坊」『平成元年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1994年
- 13 『京都市内遺跡立会調査概報 平成14年度』 京都市文化市民局 2003年
- 14 小森俊寛・原山充志「平安京左京四条四坊」『昭和61年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1989年
- 15 竜子正彦「平安京左京四条四坊（96HL1）」『京都市内遺跡立会調査概報 平成8年度』 京都市文化市民局 1997年
- 16 『京都市内遺跡詳細分布調査報告 平成26年度』 京都市文化市民局 2015年
- 17 久世康博「平安京左京四条四坊（HL104）」『京都市内遺跡試掘立会調査概報 平成元年度』 京都市文化観光局 1990年
- 18 『京都市内遺跡立会調査概報 平成5年度』 京都市文化市民局 1994年
- 19 『京都市内遺跡試掘調査報告 平成19年度』 京都市文化市民局 2008年
- 20 吉崎 伸・南 孝雄「平安京左京四条四坊」『平成12年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2003年
- 21 『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和57年度』 京都市文化観光局 1983年
- 22 『京都市内遺跡試掘調査概報 平成7年度』 京都市文化市民局 1996年
- 23 『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和62年度』 京都市文化観光局 1988年
- 24 『京都市内遺跡試掘立会調査概報 平成2年度』 京都市文化観光局 1991年

左京四条三坊

- 25 『平安京左京四条三坊十三町－長刀鉾町遺跡－』平安宮跡研究調査報告第11輯 財団法人古代學協會 1984年
- 26 小森俊寛・上村憲章「平安京左京四条三坊2」『平成元年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1991年
- 27 『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和58年度』京都市文化観光局 1984年
- 28 「平安京左京四条三坊十五町」『昭和52年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2011年
- 29 「平安京左京四条三坊十五町1」『昭和53年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2011年
- 30 「平安京左京四条三坊十五町2」『昭和53年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2012年
- 31 上村和直「平安京左京四条三坊跡」『昭和54年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2011年
- 32 『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報Ⅲ』京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会 1982年
- 33 小森俊寛・上村憲章「平安京左京四条三坊」『昭和61年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1989年
- 34 尾藤德行・伊藤 潔「左京四条三坊十六町(92HL268)」『京都市内遺跡立会調査概報 平成4年度』京都市文化観光局 1993年
- 35 『平安京六角堂の発掘調査』平安京跡研究調査報告第2輯 財団法人古代學協會 1977年
- 36 『平安京跡六角堂跡第二次発掘調査概報』財団法人古代學協會 1980年
- 37 『六角堂3・4次調査』平安京跡研究調査報告第21輯 財団法人古代學協會 2006年

左京三条四坊

- 38 『東洞院大路曇華院跡 中京郵便局新築敷地埋蔵文化財発掘調査報告』平安京跡研究調査報告第3輯 近畿郵政局・平安博物館 1977年
- 39 『平安京高倉宮・曇華院の発掘調査』財団法人古代學協會 1979年
- 40 『平安京高倉宮・曇華院跡』平安京跡研究調査報告第8輯 財団法人古代學協會 1983年
- 41 『平安京高倉宮・曇華院跡第4次調査』平安京跡研究調査報告第8輯 財団法人古代學協會 1987年
- 42 『平安京左京三条四坊四町』京都文化博物館(仮称) 調査研究報告第2集 財団法人京都文化財団 1988年
- 43 上村憲章・鎌田泰知『平安京左京三条四坊四町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2001-10 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2003年
- 44 堀内明博「平安京左京三条四坊」『昭和62年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1991年

3. 遺 構

(1) 基本層序 (図8)

調査地は、現代盛土により平坦に整地されており、地表面の標高は40.2m前後である。層序に関して調査区東壁は、室町時代後期の惣構の堀及び平安時代の高倉小路西側溝の縦断面が主になるため、南壁を参照して述べる。

地表下0.2～0.55mまでが近現代盛土および幕末の火災処理層である。その直下に江戸時代中期から末期の整地層約0.2m（上面が第1面）、室町時代後期から江戸時代前期の整地層約0.35m（上面が第2面）、室町時代の整地層約0.1～0.2m（上面が第3面）、室町時代の土取り土坑埋土（約0.6～1.0m）、そして地山（上面が第5面）と続く。なお第4面の整地層に関しては、調査区の東端の一部にのみ残存しており、断面図には現れないが、おおよそ標高39.0～38.9m（地表下1.2～1.3m）で確認した。

第1面（江戸時代中期から末期）、第2面（室町時代から江戸時代前期）、第3面（室町時代前期）、第4面（平安時代後期）、第5面（平安時代中期）として調査を行った。

ただ、遺構の重複が密な箇所や大きく削平されている場所では、調査時に明確な時期を捉えられなかった遺構が多数ある。これらは整理作業により遺構の重複関係や出土遺物の時期を検討し再整理を行った。以下にそれぞれの面に属する主要な遺構について述べる。

(2) 平安時代中期の遺構 (第5面、図版1・13)

第5面は地山上面で検出した遺構群である。この面の主な遺構は土坑448・456がある。

土坑448 調査区の南東部で検出した土坑である。後世の土取りによって上部が削平される。検出規模は、東西1.6m、南北1.7m、深さ0.15mである。埋土は暗灰黄色シルトで、土師器・黒色土器・緑釉陶器が出土した。

表2 遺構概要表

時 代	遺 構	備 考
平安時代中期	土坑448・土坑456	
平安時代後期	建物1、柱穴列6、門2・3、塀4・5、溝261、土坑316など	溝261は高倉小路西側溝
鎌倉時代～室町時代	門1、塀3、布掘り基礎211、土坑193・386、土坑群208など	
室町時代後期 ～江戸時代前期	塀2・108、タタキ1、井戸95・301・367など	堀108は下京惣構の堀
江戸時代中期～末期	柱穴列1、石室1・2、地下室5、竈29、土坑38、集石土坑15・31・40、井戸43・44・49・55・65・284・366など	

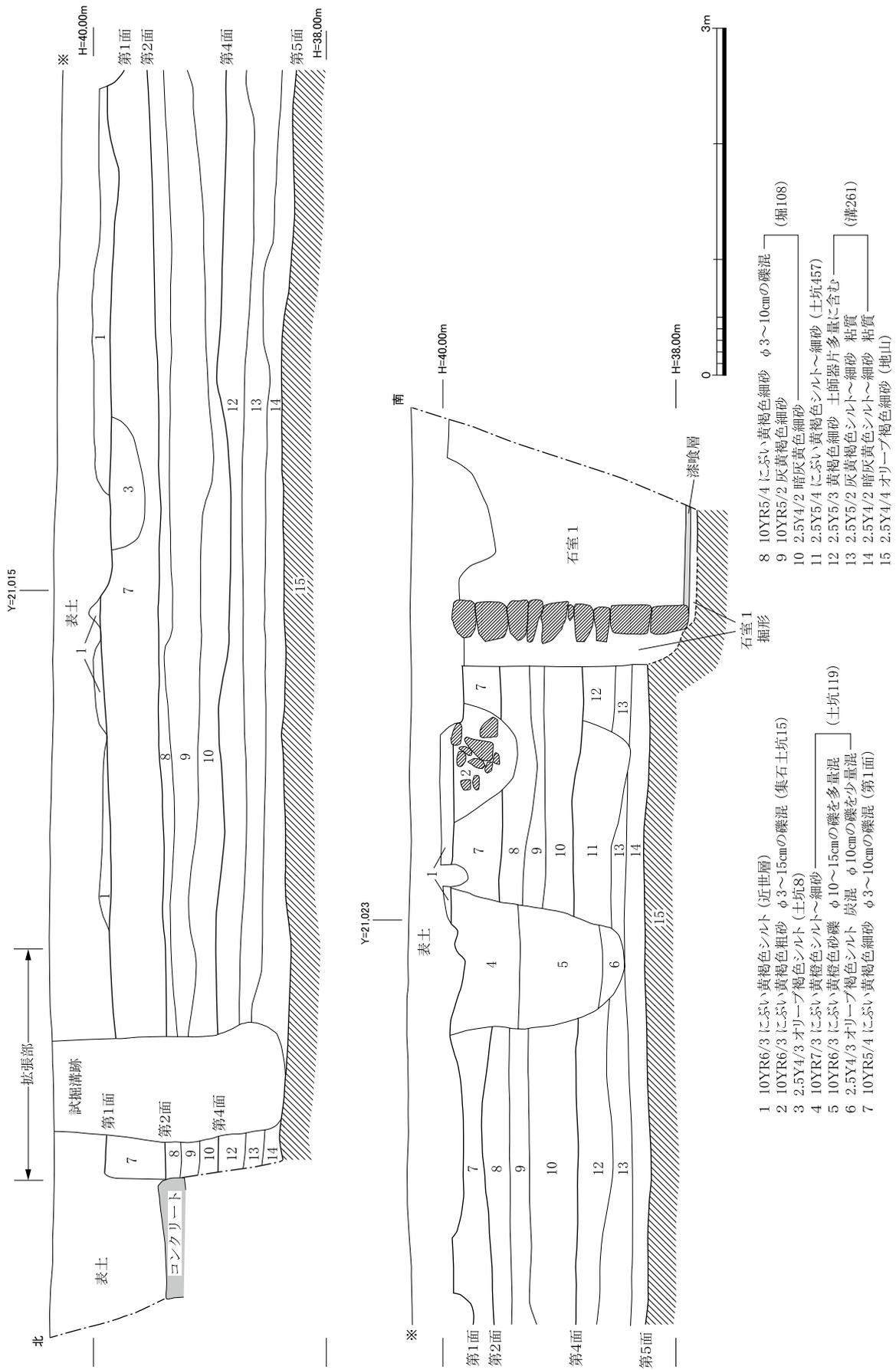
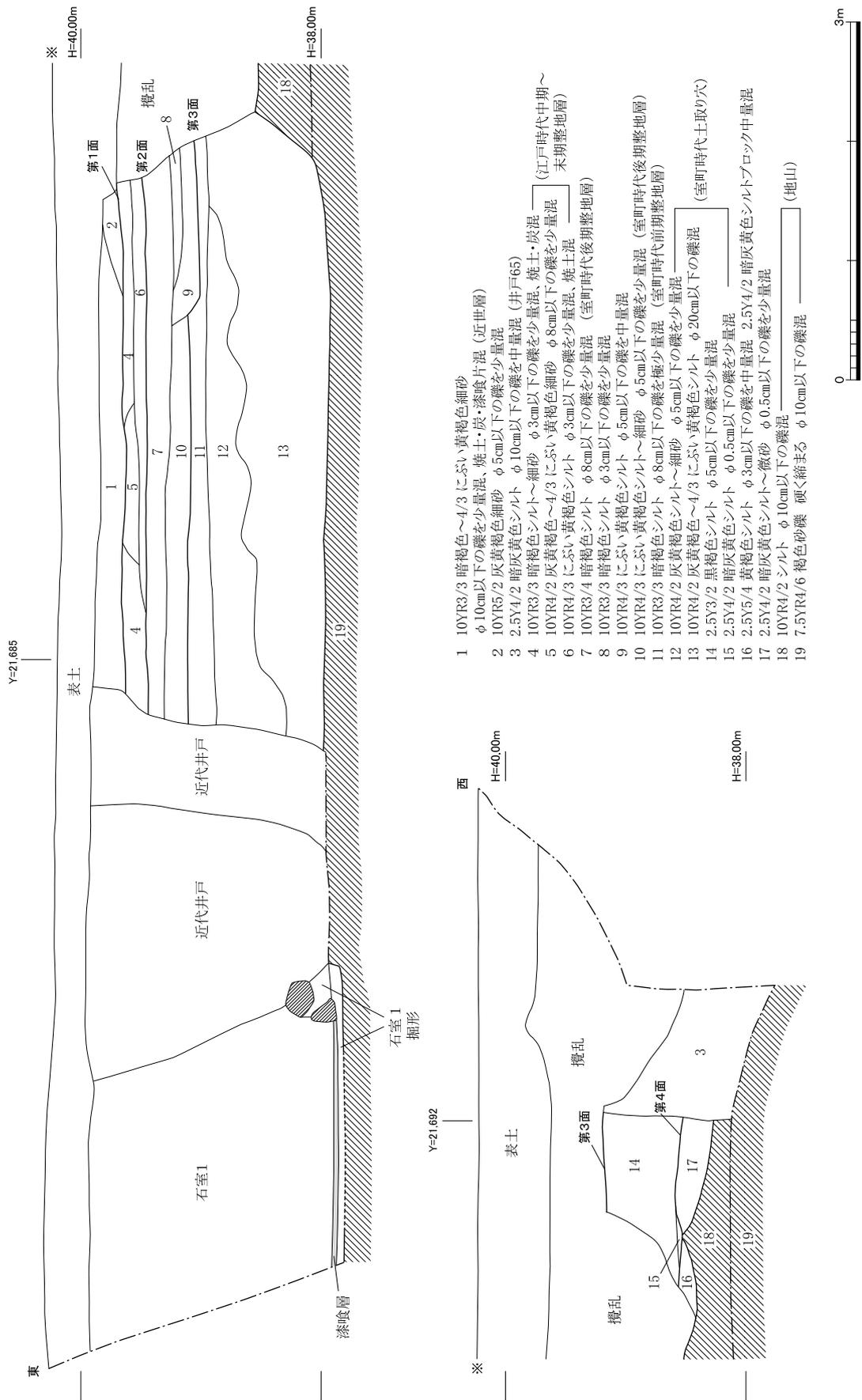


図7 調査区東壁断面図 (1 : 50)



- 1 10YR3/3 暗褐色～4/3 にぶい黄褐色細砂 φ10cm以下の礫を少量混、焼土・炭・漆喰片混 (近世層)
- 2 10YR5/2 灰黄褐色細砂 φ5cm以下の礫を少量混
- 3 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト φ10cm以下の礫を少量混 (江戸時代中期～末期整地層)
- 4 10YR3/3 暗褐色シルト～細砂 φ3cm以下の礫を少量混、焼土・炭混
- 5 10YR4/2 灰黄褐色～4/3 にぶい黄褐色細砂 φ8cm以下の礫を少量混、焼土混
- 6 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト φ3cm以下の礫を少量混、焼土混
- 7 10YR3/4 暗褐色シルト φ8cm以下の礫を少量混 (室町時代後期整地層)
- 8 10YR3/3 暗褐色シルト φ3cm以下の礫を少量混
- 9 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト φ5cm以下の礫を少量混
- 10 10YR4/3 暗褐色シルト φ8cm以下の礫を少量混 (室町時代後期整地層)
- 11 10YR3/3 暗褐色シルト φ8cm以下の礫を少量混、(室町時代前期整地層)
- 12 10YR4/2 灰黄褐色シルト～細砂 φ5cm以下の礫を少量混
- 13 10YR4/2 灰黄褐色～4/3 にぶい黄褐色シルト φ20cm以下の礫を少量混 (室町時代取り穴)
- 14 2.5Y3/2 黒褐色シルト φ5cm以下の礫を少量混
- 15 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト φ0.5cm以下の礫を少量混
- 16 2.5Y5/4 黄褐色シルト φ3cm以下の礫を少量混、2.5Y4/2 暗灰黄色シルトブロック中量混
- 17 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト～微砂 φ0.5cm以下の礫を少量混
- 18 10YR4/2 シルト φ10cm以下の礫混 (地山)
- 19 7.5YR4/6 褐色砂礫 硬く締まる φ10cm以下の礫混

図8 調査区南壁断面図 (1 : 50)

土坑456 調査区の南東部で検出した土坑である。土坑448と同じように、上部が削平される。検出規模は、東西1.3m、南北1.5m、深さ0.14mである。埋土は暗灰黄色シルトで、土師器・緑釉陶器・緑釉陶器素地が出土した。

(3) 平安時代後期の遺構 (第4面、図版2・13)

第4面の主な遺構には、建物1、柱穴列6、門2・3、堀4・5、溝261、土坑316などがある。

建物1 (図9) 調査区の南西部で検出した東西3間以上、南北2間以上の掘立柱建物である。東西の柱穴列の柱間は1.5~1.7m、柱穴の掘形は径0.4~0.7mである、南北の柱穴列の柱間は約1.4m、柱穴の掘形は径0.3~0.5mである。出土した遺物は、土師器小片のみで時期は不明であるが、門・堀との関係から平安時代後期と考える。

柱穴列6 (図10) 調査区の北西部で検出した東西方向4間以上の柱穴列である。柱間の間隔は一定ではないが約1.5m(5尺)で、柱穴の掘形は径0.3~0.6m、深さは0.15~0.3mである。建物または宅地内の区画施設と考えられる。出土した遺物は、土師器小片のみである。

門2 (図版7・14) 北三門と北四門の境界推定ライン付近で検出した掘立柱の門である。柱間は1.8m(6尺)で、柱穴の掘形は径0.7~0.8mである。門の構造は、控柱の柱穴を確認できなかったため親柱二本のみの棟門もしくは冠木門であったと考えられる。北側の柱穴は柱痕が南に広

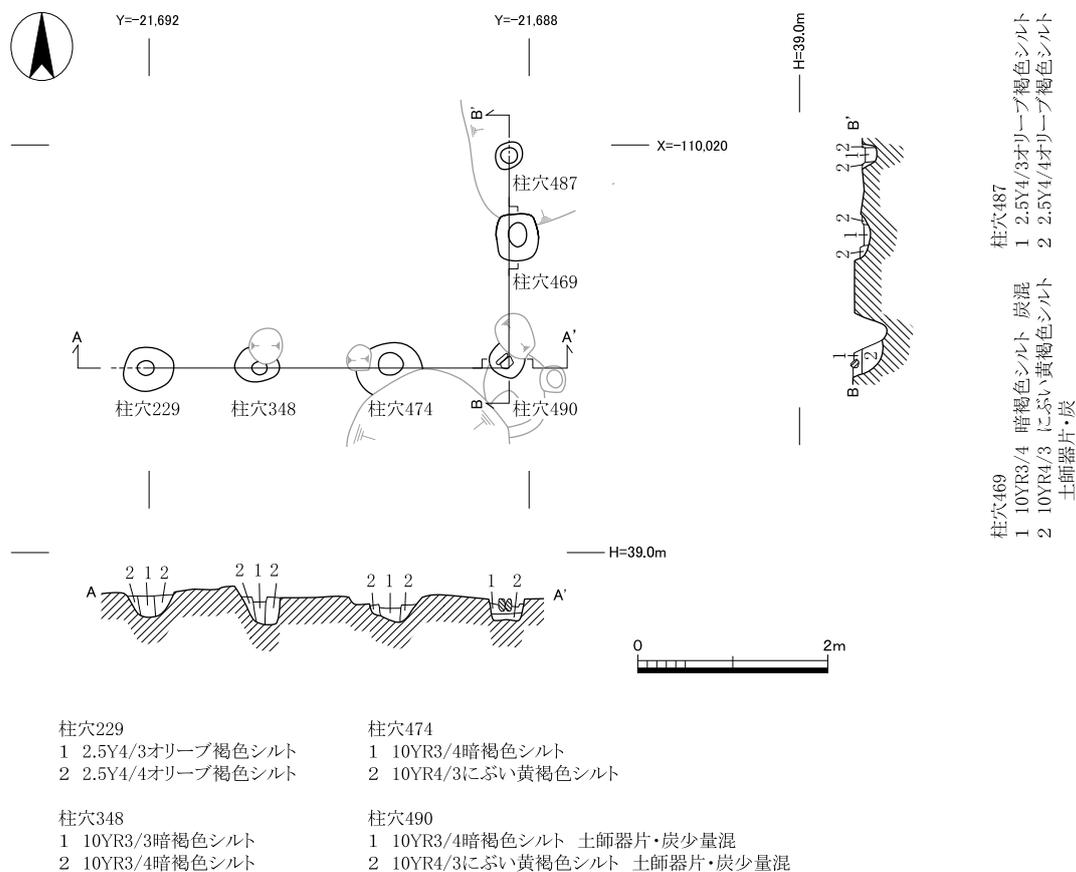


図9 建物1実測図 (1:80)

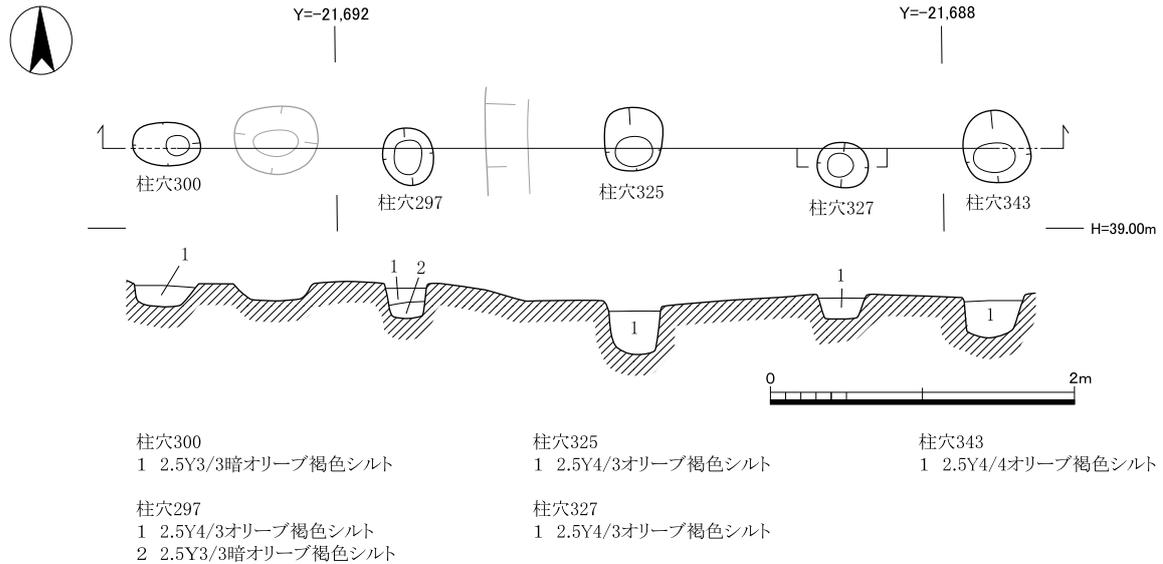


図10 柱穴列6実測図（1：50）

がっており、これは柱が抜き取られた痕跡だと考えられる。

堀4（図版7・14） 調査区東端、高倉小路築地心推定位置とほぼ同位置で検出した門2に取り付く堀である。溝261の埋没後に成立する。柱間は一定ではなく1.2～1.6mで、柱穴の掘形は径0.4～0.6mである。掘形の埋土からは12世紀代の土師器小片が出土している。堀付近では、柱穴を多数検出しており、複数回の建て替えが行われたと考えられる。

門3（図版7・14） 北三門と北四門の境界推定ライン付近で検出した掘立柱の門である。柱間は約1.8m（6尺）で、柱穴の掘形は、径0.7～0.8mである。門2と同様に、控柱の柱穴は確認できなかったため棟門もしくは冠木門であったと考えられる。

堀5（図版7・14） 堀4の西側約0.6mで検出した南北方向の堀である。柱間は一定ではなく1.2～2.4mで、柱穴の掘形は径0.3～0.4mである。掘形の埋土からは11世紀代の土師器小片が出土した。

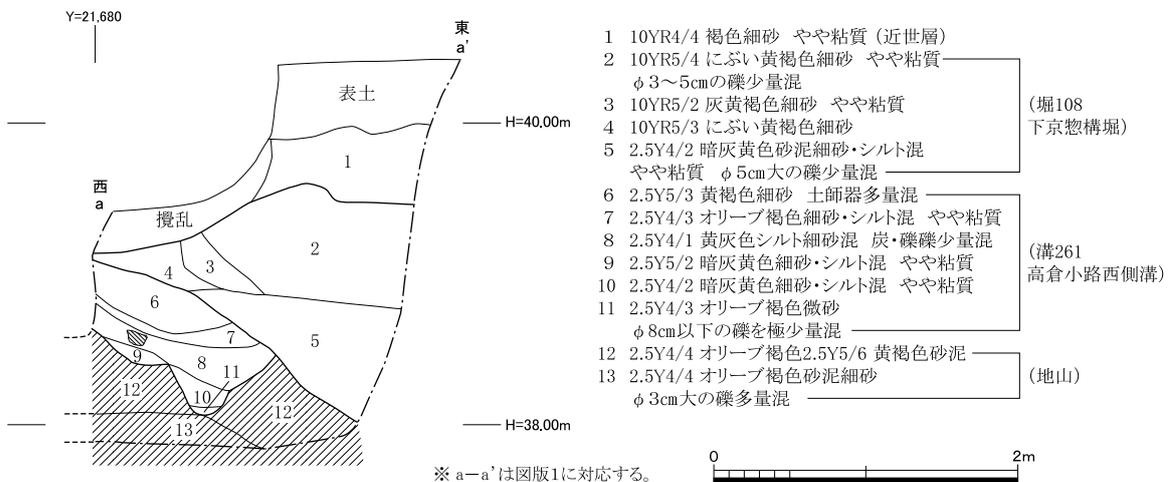


図11 拡張部北壁断面図（1：50）

溝261 (図11、図版14) 高倉小路西築地心推定位置から東に約0.5mで検出した南北方向の溝である。高倉小路西側溝である。西肩口及び底部を検出し、南北方向にさらに延長する。検出規模は、幅1m以上、深さ約0.6mである。東肩は堀108によって削平される。埋土は大きく3層(層6・7、層8・9、層10・11)に分けられる。埋土には水の流れた痕跡が認められないことから、人為的に埋められたと考えられる。また、層7下部に11世紀中頃の土師器片や炭とともにネコの大腿骨・脛骨・腓骨・中足骨などがまとまって出土した¹⁾(図版20)。層6からは12世紀の土師器も出土していることから、最終的な埋没時期は12世紀ごろと考えられる。

土坑316 調査区南西部で検出した土坑である。直径約1.1m、深さ約0.2mで、南半は削平される。平安時代後期の土師器や軒丸瓦・平瓦などが出土した。

(4) 鎌倉時代から室町時代の遺構(第3-2・3-1面、図版3・4・15)

第3面は、大規模な土取り土坑群と、それを埋め立て整地した後に成立する遺構群がある。前者を第3-2面、後者を第3-1面として報告する。

第3-2面(図版3・15)

Y=-21,681~692の東西約10mの幅で南北方向の帯状に鎌倉時代から室町時代の土取り土坑を多数検出した。土取りは連続して行われており、一つ一つの平面形ははっきりせず、掘り下げた段階で地山面に残る掘形からおおむねの単位を把握できたに過ぎない。埋土に含まれる遺物は、鎌倉時代から室町時代にまでわたる。

土坑386(図12) 土坑群の中では最も早い段階のもので、調査区東部で検出した。深さは0.44mで、埋土は上下2層に分かれる。南北方向に長く、調査区北壁から約13m南まで延びる。埋土からは13世紀後半に属する土師器片が少量出土した。

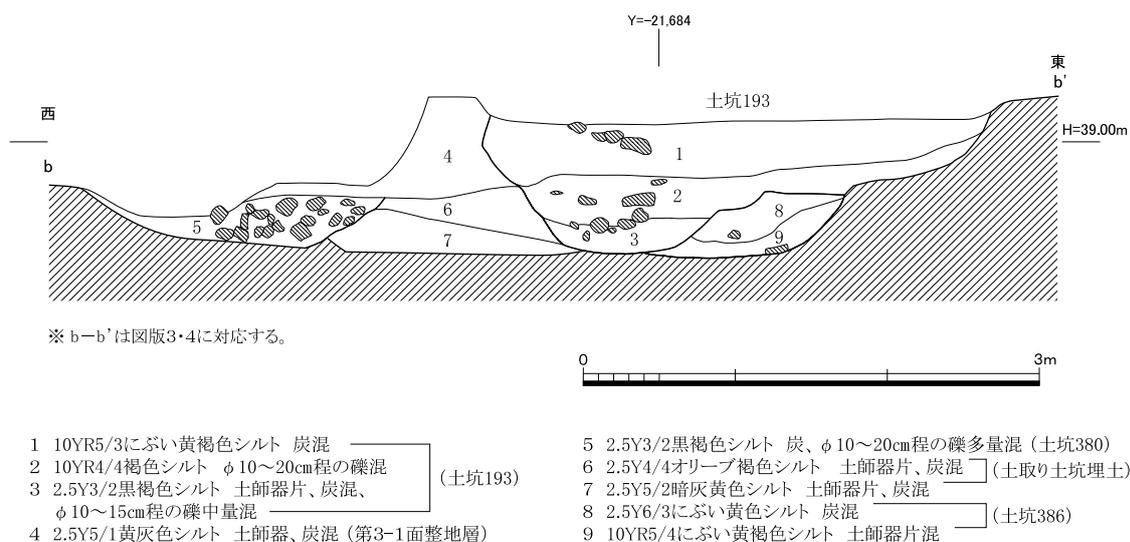


図12 土取り土坑群断面図(1:50)

第3-1面 (図版4・15)

第3-1面の主な遺構には、門1、塀3、布掘り基礎211、土坑193、土坑群208がある。大半は、調査区の西側に広がる土取り土坑を埋めた埋土およびそれと同時に行われた整地層上面で成立していた。

門1 (図版8) 調査区東端で検出した高倉小路に開く南北棟の門である。柱間は2.4m (8尺)で、柱穴の掘形は径約0.6mである。南側の柱穴には礎石が据えられていた。また、塀3の東側で南北方向の石列191を検出した。石の大きさは0.3~0.4mである。この石列は北側3石と南側2石に分かれ中央部分は失われている。門の方位は北に対して約3度西に振る。石列の検出から門の基壇が存在したことが考えられる。

塀3 (図版8) 門1に取り付く塀である。方位は北に対して約3度西に振る。柱間は約1.8m (6尺)で、柱穴の掘形は径0.4~0.6mである。地下式礎石を有するが、抜き取られているものもある。

布掘り基礎211 (図13) 調査区南西部で検出した東西方向の布掘り基礎である。方位は約1.5度北に振れており、塀3とおおむね直交する。規模は、幅0.5~0.8m、深さ約0.2m、長さ約8mで、調査区外西側へ延長する。埋土は2層に分かれる。下層に灰黄褐色シルトを埋めた後、大きさ0.3m程の礎石を5石配し、上層のオリブ褐色シルトで整地を行う。石の上面の高さがほぼ同じであることから礎石の上に地覆が置かれ、その上に柱が据えられていた可能性が考えられる。

土坑193 (図12) 調査区東部で検出した。南北約0.9m、東西約3.3m、深さ約0.8mである。埋土は3層に分けられ、2層目以下には径0.1~0.2mほどの礫が多量に含まれていた。埋土から15世紀代の土師器片や青磁などが出土した。

土坑群208 調査区の南西部で検出した。規模は、東西約10m、南北約1.5m、深さ約0.6~1.0mである。検出面では各土坑の平面形ははっきりせず、また底部の形状が不整形であり、地山上面まで掘削されていることから連続した土取り土坑群であると考えられる。

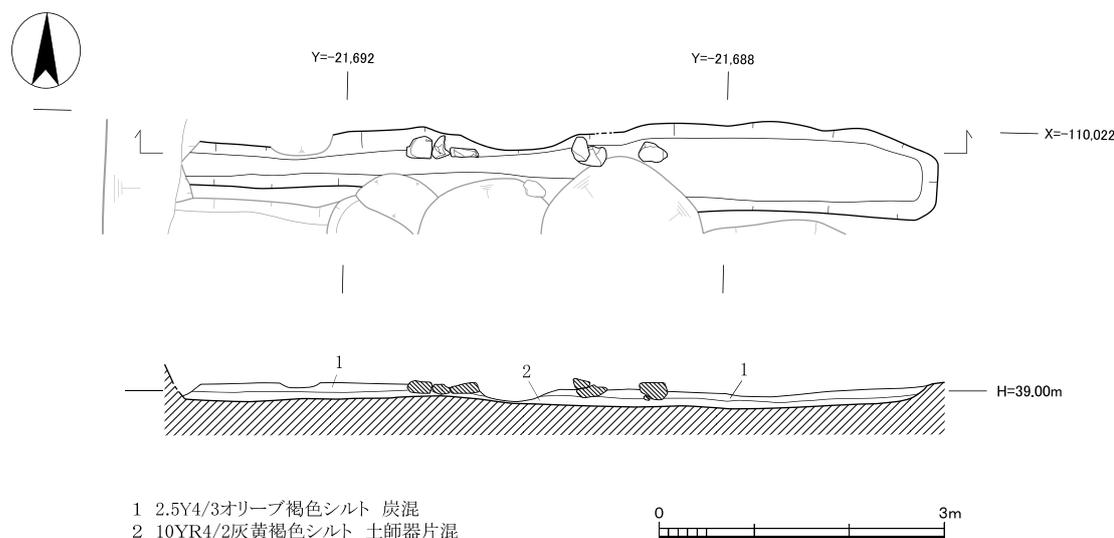


図13 布掘り基礎211実測図 (1 : 80)

(5) 室町時代後期から江戸時代前期の遺構 (第2面、図版5・16)

第2面の主な遺構には、堀108・2、タタキ1、井戸95・301・367などがある。

堀108 (図11、図版14・16) 調査区東端で検出した堀で、検出段階は1.0～1.2mの幅であったが、拡張部の調査により、この堀がさらに広がり、幅2m以上、深さ1.5m以上あることが判明した。底部は検出しておらず、西肩のみ検出した。埋土は、上層が拳大の礫を混ぜて固く締まる。埋土下層(層5)からは16世紀後半の土師器片や青磁などが出土した。規模が通常の道路側溝とはかけ離れていることや検出位置から、この堀は下京惣構の東辺の堀にあたると思われる。

堀2 (図版9) 調査区の東端で検出した南北方向の柱穴列である。堀108の埋没後に成立する。柱間は約1.2m(4尺)で、柱穴の掘形は径約0.4mのものが主で0.6mのものもある。深さは主に0.15mである。遺物は土師器細片のみの出土であり、時期は不明である。

タタキ1 (図版16) 調査区中央やや南寄りで見出した。検出した範囲は、東西約9.4m、南北約2.5mである。細かい砂礫が敷かれており、非常に固く叩き締められている。建物の屋内に当たると考えられる。

井戸301 (図14) 調査区の北西部で見出した円形石組の井戸である。底が深く作業の安全性を考慮し、木枠までの掘り下げにとどめている。掘形の平面形はほぼ円形を呈し、規模は、掘形径約2m、深さ約2.2m以上である。掘形中央に平面形円形の石組を設ける。石組の内径は約0.8mである。石組の底面には横板で組んだ木枠がわずかに残る。埋土からは、16世紀末頃の土器が出土した。

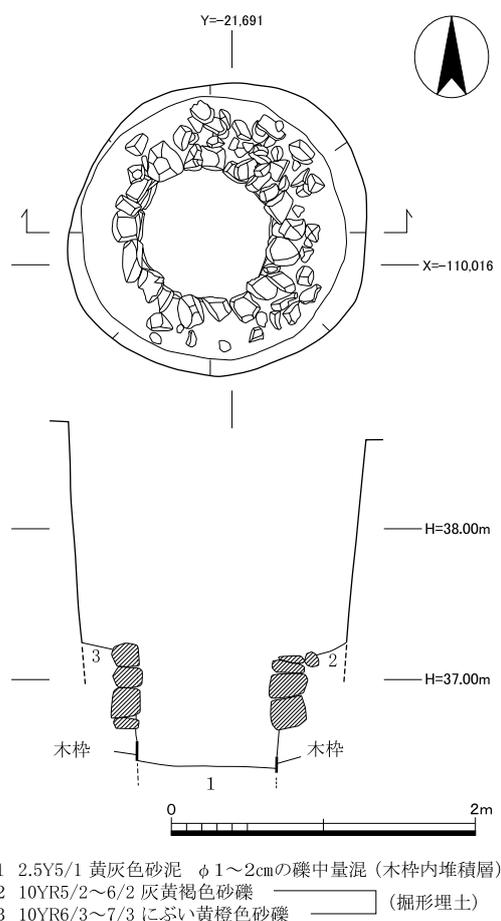


図14 井戸301実測図 (1:50)

(6) 江戸時代中期から末期の遺構 (第1面、図版6・17)

第1面の主な遺構は、江戸時代の石室1・2、地下室5、柱穴列1、竈29、集石土坑15・31・40、井戸群などがある。集石土坑は、いずれも井戸や竈の近くで検出していることから排水樋として用いられたと考えられるが、詳細は不明である。井戸群には、井戸43・44・49・55・65・284・366の計7基あるが、底が深く作業の安全性を考慮したため、底部まで確認できたのは井戸55のみである。

石室1 (図15、図版10) 調査区南東部で検出した石室である。花崗岩の割石を主体として構築されている。南西部は明治時代の井戸による攪乱を受ける。掘形は東西3.4m以上、南北1.9m以上、石組の内法は、東西3m以上、南北1.7m以上、検出面からの深さは約2mである。調査区の南側及び東側へ延長するため全体の大きさは不明である。用いられている石材の大きさは、大小さまざまあるが、大きいもので約0.6m×0.3



図15 石室1 (南から)

mである。底面は、西側へやや下がるように傾斜しており、また全面に漆喰が約2cmの厚さで貼られている。底面北西部には直径約20cmの掃き溜めが設けられている。埋土には焼土や焼けた瓦、壁土などが含まれていた。埋土から19世紀の土器類が出土したことから、この石室は、蛤御門の変の火災で焼失したものと考えられる。

石室2 (図版11・17) 石室1の北西側で検出した東西方向に長い長方形の石室である。花崗岩の割石を積み上げて構築している。掘形は東西約3m、南北約2.6m、石組の内法は東西約3m、南北約1.75m、検出面からの深さは約1mである。南西部には階段が取り付き、東西の掘形幅が約0.6m広がっている。石室1と比べて規模や石材の大きさは小さく、大きいもので約0.5m×0.2mである。床面および階段の土部分は叩き締められていたが、漆喰は貼られていない。石室1と同様に焼土や焼けた瓦、壁土などで埋められており、埋土には鉄釘なども含まれていた。蛤御門の変で焼失したと考えられる。

地下室5 (図版12・17) 調査区の北西隅で検出した地下室である。、埴塼を壁材に転用している。地表下約1.9m、現代盛土直下で検出しているため、本来の高さは不明であるが、最大で埴塼を

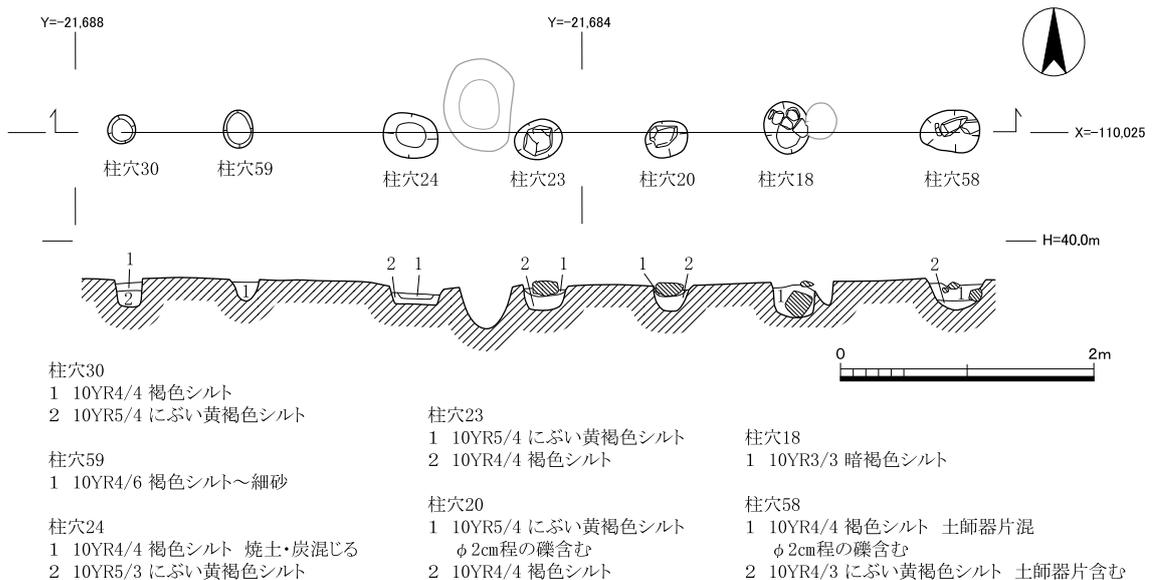
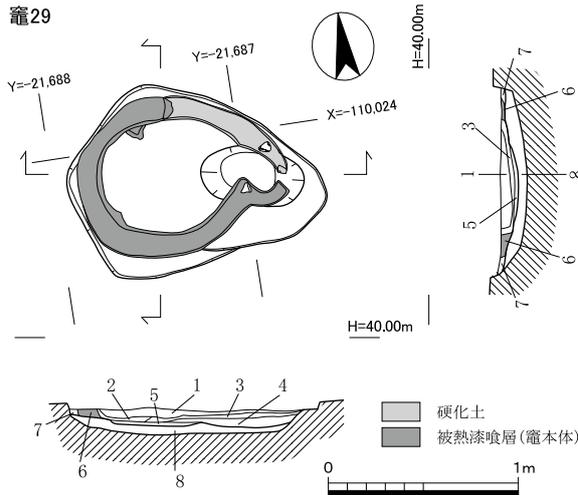


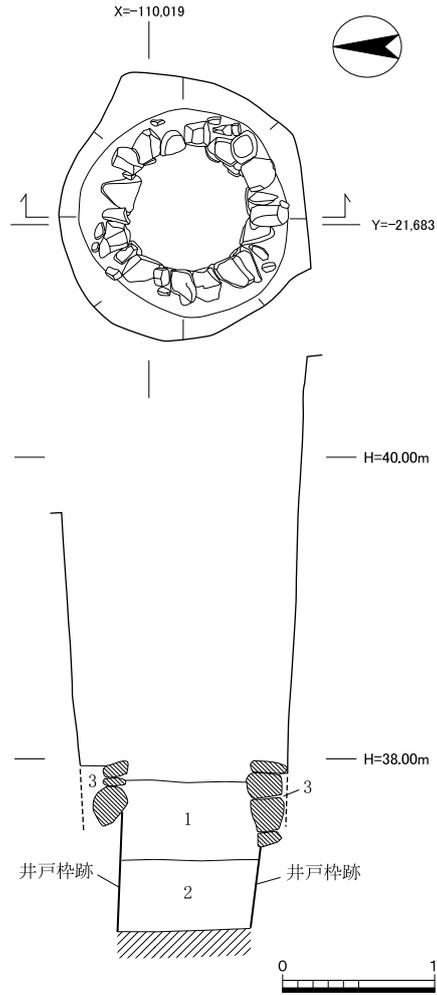
図16 柱穴列1 実測図 (1:60)

竈29



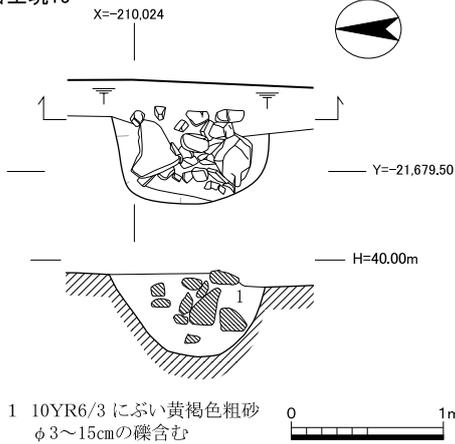
- 1 10YR4/1~5/8 褐灰色シルト~黄褐色シルト
5YR4/8 赤褐色シルト、焼土が大量混
- 2 7.5YR3/1 黒褐色シルト(炭層)
- 3 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 炭混
- 4 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト
- 5 10YR3/3 暗褐色シルト(被熱硬化層)
- 6 10YR5/8 黄褐色シルト(被熱漆喰層・竈本体)
- 7 10YR4/4 褐色シルト
- 8 10YR5/2 灰黄褐色シルト 炭混(竈掘形)

井戸55

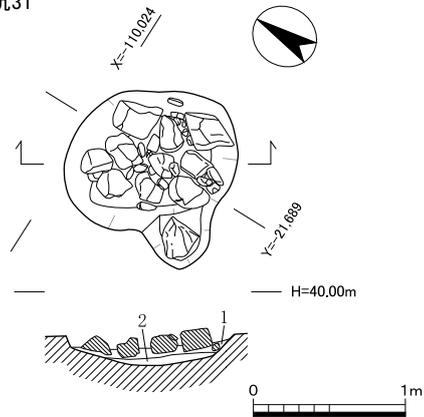


- 1 10YR6/3~7/3 にぶい黄橙色粗砂
φ1~3cmの礫中量混 (井戸枠内堆積層)
- 2 10YR4/3~5/4 にぶい黄橙色砂礫
φ10~20cmの礫少量混
- 3 2.5Y6/3 にぶい黄色砂礫(掘形埋土)

集石土坑15



集石土坑31



集石土坑40

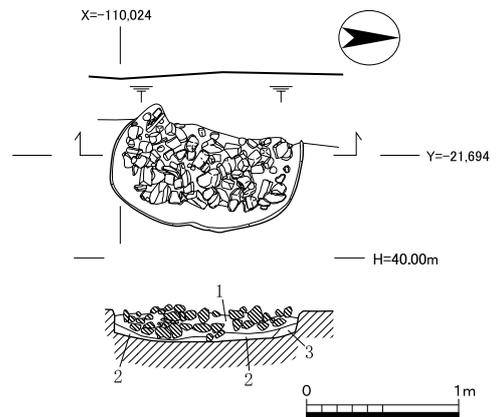


図17 竈29、集石土坑15・31・40、井戸55実測図(1:50、竈29のみ1:40)

4段積み上げていた。掘形は、東西2.5m以上、南北2.9mである。調査区の西側へさらに延長する。埋土から18世紀の染付碗などが出土した。

柱穴列1（図16） 調査区南部で検出した東西方向の柱穴列である。礎石を据えるが、抜き取られているものもある。柱穴の掘形は径約0.4m、深さ約0.2m、柱間は一定ではなく約1.0mと約1.3mのものがある。遺物は土師器皿小片が出土した。

竈29（図17） 調査区南部中央で検出した竈である。検出規模は、東西約1.1m、南北約0.85mである。本体は幅約0.15mの漆喰で構築されており、東西方向に長い楕円形を呈する。西側の燃焼部は被熱により硬化している。最下部のみ残存しており、焚口の痕跡は確認できなかった。東端はすぼまり、下部は掘り下げられていることから、煙道をもつと考えられる。埋土から棧瓦が出土した。

土坑38 調査区南西部で検出した東西1.15m、南北1.0m、深さ約0.5mの土坑である。埋土は黒褐色シルトで、18世紀中頃の遺物が出土した。

集石土坑15（図17） 調査区の南東端で検出した。検出規模は、東西約1.0m、南北約0.6m、深さ約0.5mである。調査区外東側へさらに延長する。大きさ0.1～0.4mほどの石を詰める。埋土からは土師器片や染付、棧瓦などが出土したが、瓦を除き小片である。

集石土坑31（図17） 調査区南部中央付近で検出した。規模は、東西約1.1m、南北約1.1m、深さ約0.15mで、平面形はいびつな円形を呈する。最大約0.4mの石を詰める。埋土から土師器片や染付などの小片が出土した。

集石土坑40（図17） 調査区南西部で検出した。東西約0.7m、南北約1.2m、深さ約0.3mである。さらに調査区西側へ延長する。大きさ0.1～0.15mほどの石を詰める。埋土から棧瓦などが出土した。

井戸55（図17） 調査区東部で検出した円形石組の井戸である。掘形の平面形はほぼ円形を呈し、検出面での規模は、直径約1.7m、深さ約2.7mである。掘形の中央に平面形円形の石組を設ける。石組の内径は約0.8mである。掘形内中央に井戸枠の痕跡が残る。井戸枠は一辺1.7mほどの方形に復元できる。埋土からは18世紀中頃の土器類が出土した。

註

- 1) 東海大学の丸山真史氏の御教示による。

4. 遺 物

(1) 遺物の概要

遺物は整理箱で86箱出土した。内訳は、土器・瓦類が85箱、金属製品が1箱である。土器類が圧倒的に多く、次いで瓦類である。出土遺物の時期は、平安時代、鎌倉時代～室町時代、安土桃山時代、江戸時代の各時期である。

調査では第1面から第5面の各遺構検出面で遺物を取り上げたが、遺構同士の重複があり、新しい時代の遺構埋土に古い時代の遺物が混入する場合も見られた。以下、遺構ごとに出土した主な遺物について種別に概要を述べる。

(2) 土器類

平安時代 (図18、図版18)

土坑448出土土器 (1～6) 1・2は土師器皿である。1は口径9.9cm、器高1.3cmである。口縁部はヨコナデで強く屈曲し、端部を小さくつまみ上げる。体部外面はオサエ、底部内面はナデ。10世紀後半。2は口径13.8cm、復元器高3.1cmである。口縁部はヨコナデでわずかに屈曲し、端部を小さくつまみ上げる。体部外面はオサエ、底部内面はナデ。9世紀後半。

3は黒色土器椀、内面を黒色化させたA類である。口径21.0cm、器高5.2cm。内面はミガキ、外面はヘラケズリ、口縁端部はヨコナデ。

4は緑釉陶器皿、5・6は緑釉陶器椀である。4は口径14.5cm、器高2.4cm、底径7.2cm。5は口径14.4cm、器高4.2cm、底径7.0cm。6は口径19.8cm、器高6.8cm、底径9.0cm。いずれも削り出しの

表3 遺物概要表

時 代	内 容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
平安時代	土師器、須恵器、黒色土器、緑釉陶器、灰釉陶器、輸入陶磁器、瓦類、金属製品、銭貨		土師器33点、黒色土器1点、緑釉陶器4点、緑釉陶器素地2点、瓦類22点、金属製品16点		
鎌倉時代～室町時代	土師器、須恵器、灰釉陶器、瓦器、白色土器、焼締陶器、輸入陶磁器、瓦類、金属製品		土師器7点、輸入青磁1点、瓦類1点、金属製品2点		
安土桃山時代	土師器、須恵器、瓦器、白色土器、焼締陶器、輸入陶磁器、瓦類、金属製品		土師器1点、輸入青磁1点		
江戸時代	土師器、須恵器、瓦器、焼締陶器、施釉陶器、輸入陶磁器、瓦類、金属製品、土製品		土師器12点、施釉陶器11点、染付5点、青磁1点、金属製品19点、土製品6点		
合 計		92箱	145点 (6箱)	6箱	80箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、A・Bランクの遺物を抽出したため、出土時より6箱多くなっている。

平高台で、内外面全面に施釉する。京都産、9世紀後半。

土坑456出土土器（7～10） 10は土師器高杯である。裾部は大半が欠損している。杯部の口径は復元30.6cm。脚部には芯棒痕跡が残り、面取りは7面でそれぞれの幅は一定ではない。9世紀。

7は緑釉陶器耳皿である。全体に密にミガキ。底部内面には陰刻が施される。高台部分は欠損しており、口径は不明である。器高2.8cm。東海地方産。9世紀。8・9は緑釉陶器素地である。いずれも口縁部が欠損しており、口径は不明である。焼成は土師質。9世紀。8は残存器高2.0cm、底径7.2cm。底部は削り出しの平高台である。9は残存器高2.9cm、底径6.7cm。底部は回転糸切り。

溝261出土土器（11～31） 多量の土師器皿が出土した。11～31は土師器皿である。口縁内外面を横ナデし口縁端部をわずかにつまみ上げる皿A（11～17）、口縁部を内側に折り曲げたコースター形の皿Ac（18～22）、口縁部が外反し外面は二重ナデを施す皿N（23～31）がある。皿Nには、口径10.8～11.8cmのもの（23～26）、13.6～15.5cmのもの（28～31）、その間の12.9cmのもの（27）の3群がある。大半が溝の北部でまとまって出土し（図11－層6下部）、11世紀中頃に属する。

堀4出土土器（32～35） 32～35は土師器皿片である。口縁部はナデが二段に施され、端部が立ち上がり、断面が三角形を呈する。いずれも口径の復元は不可能である。12世紀代。

土坑316出土土器（36～40） 36～40は土師器皿である。サイズは、小（36・37）と大（38～40）がある。小の口径はいずれも9.2cm。大の口径は14.5～17.6cmである。口縁部は直立気味で、ナデは二段に施される。12世紀代。

鎌倉時代から室町時代（図18、図版18）

土取り土坑群出土土器（41～46） 41～45は土師器皿である。41・42は小片のため口径の復元が不可能。43は口径8.8cm、器高1.4cm。44は口径11.4cm、器高2.0cm。45は口径12.8cm、器高2.3cm。

46は中国製青磁壺の口縁部及び頸部である。

布掘り基礎211出土土器（47・48） 47・48は土師器皿片である。小片であり口径の復元が不可能。15世紀代。

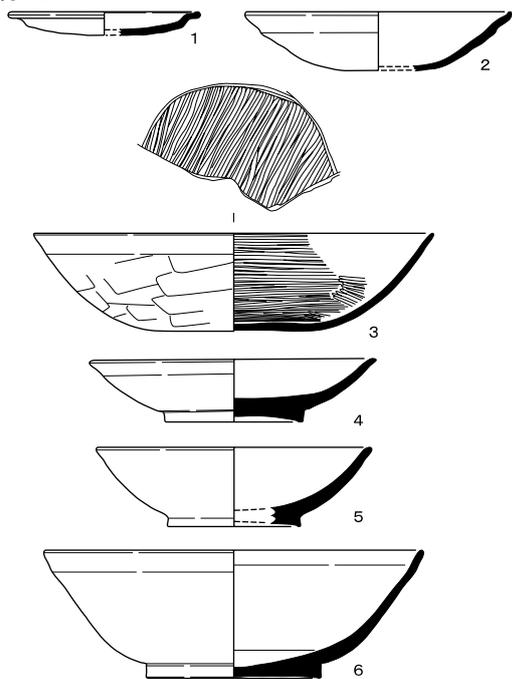
安土桃山時代から江戸時代前期（図18）

堀108出土土器（49・50） 49は土師器皿である。口径10.3cm、器高2.0cm。口縁部はやや外反し、端部をわずかにつまみ上げる。

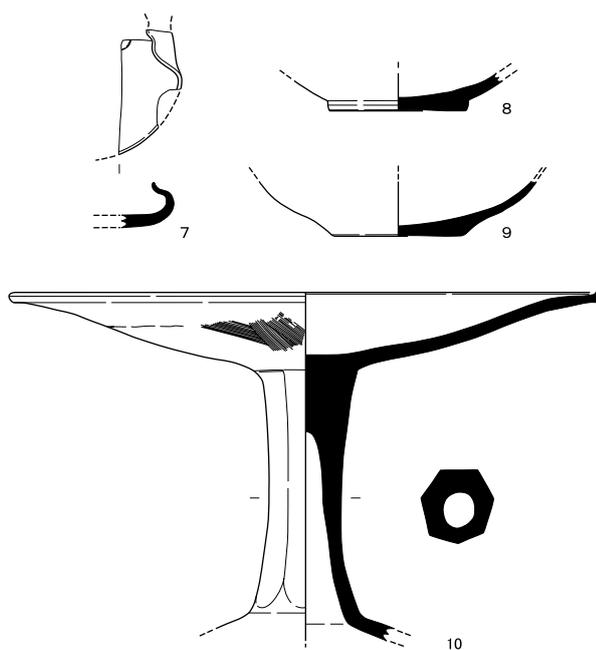
50は中国製青磁椀である。底径は5.6cm、残存器高3.0cm。底部は削り出し高台で、端部を面取りする。底部内面には陰刻が施される。16世紀後半。

井戸301出土土器（51～54） 51～53は土師器皿である。51は口径8.8cm、器高2.2cm。口縁端部をつまみ上げる。52は口径9.5cm、器高2.2cm。53は口径10.6cm、器高2.2cm。52・53は口縁部に煤が付着する。

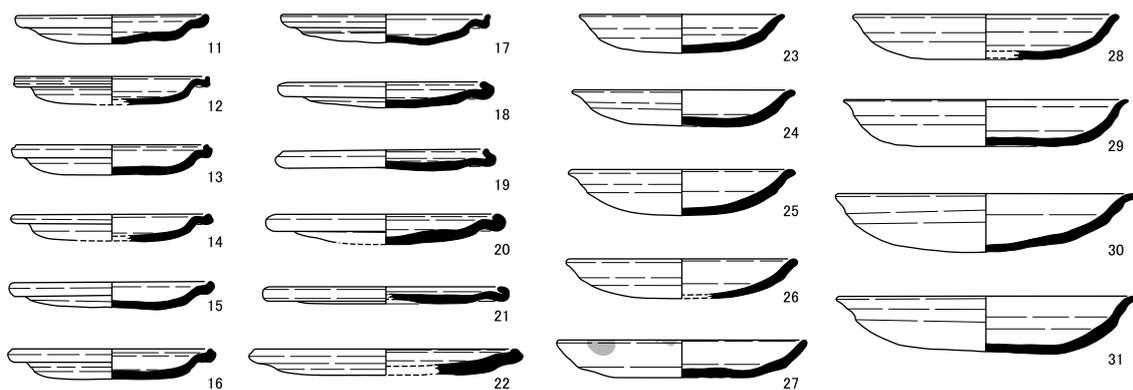
土坑448



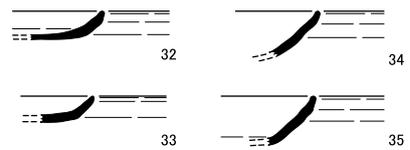
土坑456



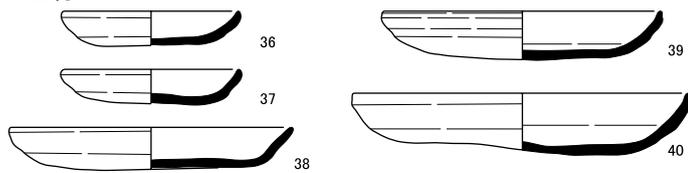
溝261



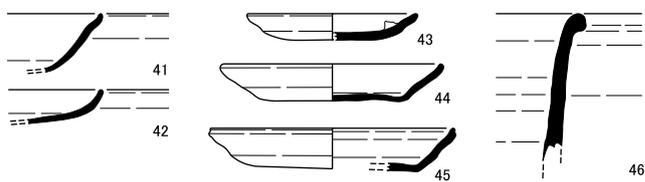
塀4



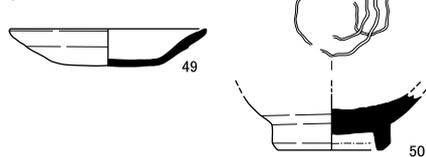
土坑316



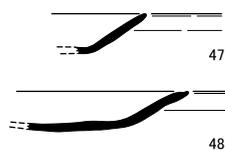
土取り土坑群



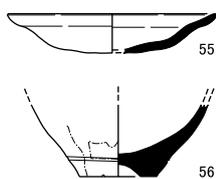
堀108



布掘り基礎211



井戸95



井戸301

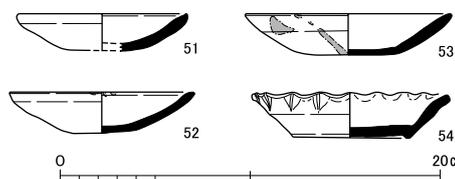


图18 出土土器实测图1 (1:4)

54は瀬戸・美濃系施釉陶器の皿である。口径10.1cm、底径6.1cm、器高2.4cm。口縁部の両面をヘラ状の工具で花卉状に成形したもので、全面に鉄釉が施される。底部は削り出しの平高台である。16世紀後半。

井戸95出土土器 (55・56) 55は土師器皿である。口径10.8cm、器高2.3cm。口縁部ヨコナデ、体部外面オサエ。

56は肥前系施釉陶器の椀である。口径不明、底径4.0cm、残存器高3.8cm。底部は削り出しの輪高台である。内面には全体に施釉するが、外面は部分的である。17世紀初頭。

江戸時代中期から末期 (図19、図版18)

石室1出土土器 (57～60) 57・58は土師器皿である。57は口径4.7cm、器高1.1cmのミニチュアの皿である。口縁部はヨコナデ、内面はナデ、体部はオサエ。58は口径9.9cm、器高1.7cm。底部内面には圏線が巡る。

59は塩焼壺の蓋である。口径7.6cm、器高1.8cm。内面には布目が残る。60は塩焼壺の身である。口径6.2cm、器高5.2cm。体部には、「泉湊伊織」の刻印が施される。59・60は18世紀中頃の製品であり、石室1の埋没年代である江戸時代末期とは異なる。

石室2出土土器 (61) 61は鉄釉鍋である。口径19.9cm、器高8.8cm、底径9.0cm。底部は削り出しの輪高台。高台部分を除いて全面に施釉する。

地下室5出土土器 (62・63) 62・63は染付椀である。いずれも唐獅子と牡丹が描かれる。図示していないが同じものが全部で4客出土した。62は口径10.5cm、器高6.4cm、底径4.4cm。63は口径10.6cm、器高6.4cm、底径4.3cm。18世紀末頃。

井戸55出土土器 (64～69) 64は青磁染付の椀である。口径7.9cm、器高4.9cm、底径3.8cm。口縁端部には紅が施される。

65・66は肥前系施釉陶器である。65は皿である。残存器高4.4cm、底径7.2cm。底部内面に目痕が残る。内野山北窯に代表されるものである。66は刷毛目椀である。口径10.7cm、器高5.7cm、底径3.8cm。豊付けを除き全面に釉薬を施す。67は瀬戸・美濃系施釉陶器の片口鉢である。口径13.9cm、器高7.5cm、底径5.6cm。68・69は京焼系施釉陶器である。68は鉢である。口径は長辺が11.0cm、短辺が9.0cm、器高5.8cm、底径4.5cm。隅丸の長方形で器壁は非常に薄く、短辺側には笹の透かしが入る。長辺は一段低くなり窓が設けられる。菓子鉢として使用されたと考える。69は灯明受け皿である。口径11.4cm、器高3.3cm、底径6.0cm。底部内面に格子状の刻み目が入り、目痕が残る。

土坑38出土土器 (70～79) 18世紀代の遺物がまとまって出土した。

70～73は土師器皿である。いずれも口縁部ヨコナデ、内面ナデ、体部外面オサエ。底部内面には圏線が巡る。また、71には口縁部に煤が付着する。70は口径9.9cm、器高2.0cm。71は口径10.2cm、器高1.8cm。72は口径10.4cm、器高1.8cm。73は口径10.4cm、器高1.8cm。

74～76は肥前系染付である。いずれも底部は削り出しの輪高台である。また豊付けを除き全面に施釉する。74は皿である。口径13.5cm、器高2.9cm、底径7.4cm。見込みには椿が描かれる。75・

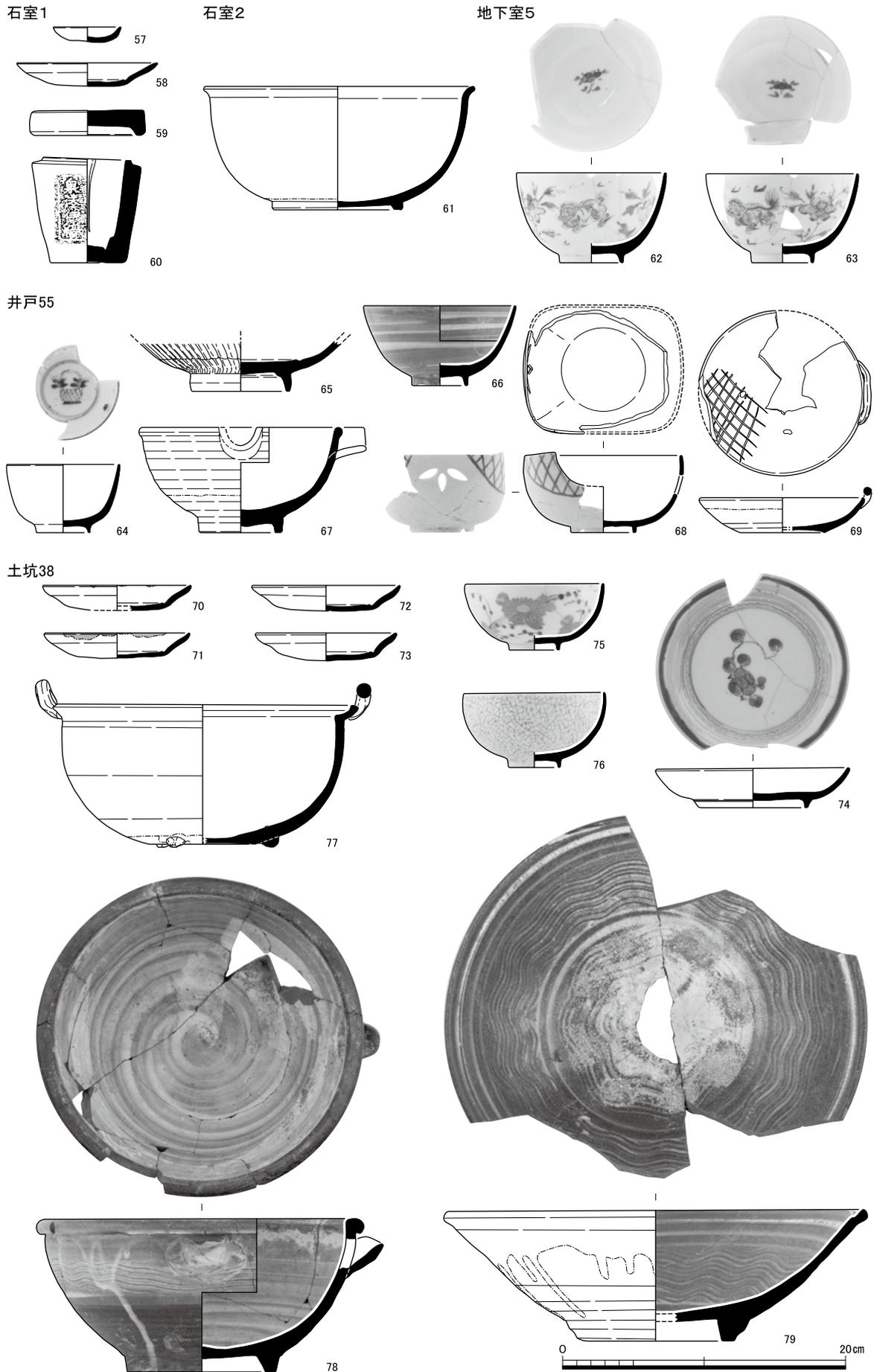


图19 出土土器实测图2 (1 : 4)

76は椀である。75は口径9.7cm、器高4.8cm、底径3.4cm。外面には菊唐草文が描かれる。76は口径10.0cm、器高5.3cm、底径3.5cm。外面には氷裂文が描かれる。77は京・信楽系施釉陶器の鍋である。口径21.0cm、器高11.9cm、底径7.4cm。底部内面には目痕が6箇所残る。底部外面を除き全面に柿釉を施し、三足を有する。78・79は肥前系施釉陶器の大型鉢である。78は片口鉢で、口径19.9cm、器高10.9cm、底径10.2cm。刷毛目文を描く。79は三島手の鉢である。口径29.4cm、器高9.4cm、底径10.5cm。底部内面に砂目痕が残る。

(3) 瓦類 (図20・21、図版19)

軒瓦は計23点出土した。1～9は軒丸瓦、10は鳥衾、11～22は軒平瓦、23はその他の瓦である。

軒丸瓦 (瓦1～9)

瓦1は単弁蓮華文軒丸瓦である。土坑287から出土。中房は平坦で、蓮子は1+5、単弁9弁に復元できる。蓮弁・子葉は凸線である。瓦当部側面、裏面布目。胎土は密で、径2mm以下の長石・石英・チャートを含む。平安時代中期。

瓦2は単弁蓮華文軒丸瓦である。土坑316から出土。中房は平坦で、単弁6弁に復元できる。蓮弁・子葉は凸線である。瓦当部側面はケズリ、裏面はナデ。胎土は密で、径3mm以下のチャートを含む。山城産、平安時代後期。

瓦3は単弁蓮華文軒丸瓦である。土坑349から出土。中房は平坦で、蓮子は1+5、単弁10弁に復元できる。瓦当部側面、裏面ともオサエ。胎土は密で、径5mm大の礫、径2mm以下の長石・石英・チャートを含む。須恵質。山城産、平安時代後期。

瓦4は単弁蓮華文軒丸瓦である。溝261から出土。中房は平坦で、蓮弁に子葉はない。瓦当部側面はケズリ、裏面はナデ。胎土は密で、径1mm以下の長石・石英・チャートを含む。山城産、平安時代後期。

瓦5は複弁蓮華文軒丸瓦である。第3面整地層から出土。中房は平坦で、蓮子は1+6、複弁6弁に復元できる。蓮弁・子葉は凸線である。瓦当部側面下半はケズリ、裏面はオサエ。胎土は密で、径2mm以下の長石を含む。瓦当径は12.4cm。山城産、平安時代後期。

瓦6は複弁蓮華文軒丸瓦である。第3面包含層から出土。中房は平坦で、蓮子は1+6、複弁8弁に復元できる。瓦当部側面はタテケズリ、裏面はオサエ。胎土は密で、径3mm以下の長石・石英を含む。瓦当径は12.9cm。山城産、平安時代後期。

瓦7は二巴文軒丸瓦である。土坑316から出土。中心に左巻き二巴文、その外周に珠文、さらにその外側に剣頭文を配する。巴文の頭部は離れ、尾部は接する。瓦当部側面はナデ、裏面は板状工具によるナデ。胎土は密で、径5mm以下の長石・石英・チャートを含む。山城産、平安時代後期。

瓦8は二巴文軒丸瓦である。土坑316から出土。瓦7と同範。瓦当部側面はナデ、裏面は板状工具によるナデ。丸瓦部凸面は縄目、裏面は布目。胎土は密で、径7mm以下の長石・石英・チャートを含む。瓦当径11.6cm。山城産、平安時代後期。

瓦9は三巴文軒丸瓦である。第1面整地層から出土。巴文は右巻三巴文である。瓦当面に範傷が

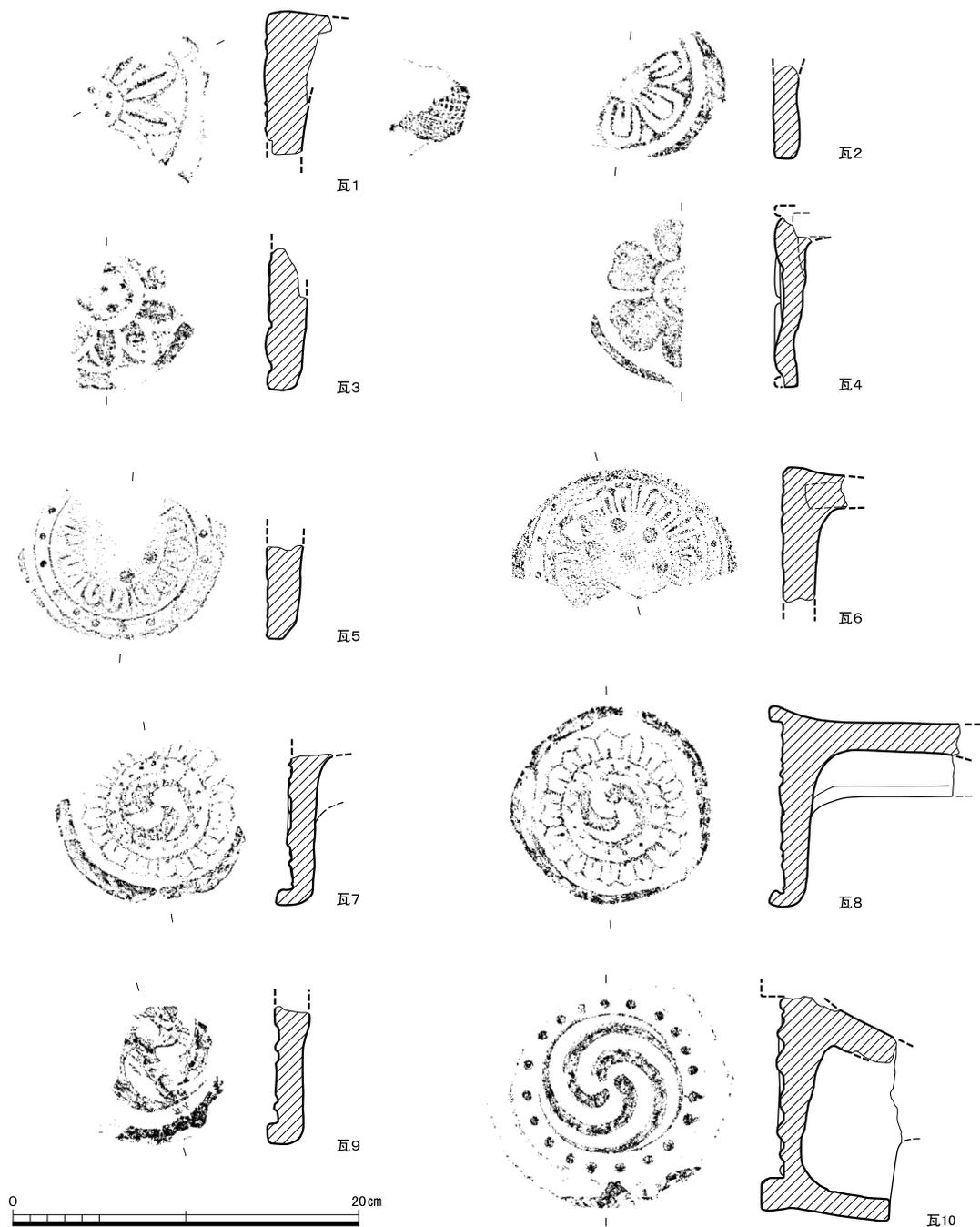


図20 軒丸瓦・鳥衾拓影及び実測図（1：4）

多い。瓦当部側面、裏面ナデ。胎土は密で、径3mm以下の長石・石英・チャートを含む。山城産、平安時代後期。

鳥衾（瓦10）

瓦10は三巴文鳥衾である。土坑117から出土。巴文は左巻き三巴文で、外区には珠文が密に巡る。巴文の頭部は離れるが、尾部は接し圏線をなす。外縁部はヨコナデ、筒部はタテナデ。胎土は密で、径2mm以下の長石・石英・チャートを含む。

軒平瓦（瓦11～22）

瓦11は唐草文軒平瓦である。溝261から出土。唐草文の主葉は連続し、緩やかに反転する。支葉は巻き込み、先端が太くなる。外区には珠文が巡る。瓦当部凹面は布目後ナデ、凸面はオサエ。胎土は密で、径8mm大の礫、径2mm以下の長石・石英・チャートを含む。平安時代中期、山城産。

瓦12は唐草文軒平瓦である。土坑333から出土。唐草文の主葉は連続し、緩やかに反転する。支葉は両側に強く巻き込む。瓦当部凸面タテケズリ。胎土は密で、径8mm大の礫、径5mm以下の長石・石英・チャートを含む。大和産、平安時代中期。

瓦13は唐草文軒平瓦である。第3面整地層から出土。唐草文の主葉は大きく反転し、支葉は強く巻き込む。外区には珠文が巡る。瓦当部凹面は布目。瓦当部裏面には縄目が残る。胎土は密で、径3mm以下の長石・石英・チャートを含む。丹波産、平安時代中期。

瓦14は偏行唐草文軒平瓦である。第3面整地層から出土。瓦当部凹面糸切り後布目、凸面オサエ。胎土は密で、径0.7～1cm大の礫、径3mm以下の長石・石英・チャート・雲母を含む。山城産、平安時代後期。

瓦15は偏行唐草文軒平瓦である。第3面整地層から出土。瓦当部凹面は糸切り後布目、凸面はヨコナデ。胎土は密で、径8mm大の礫、径4mm以下の長石・石英・チャートを含む。山城産、平安時代後期。

瓦16は偏行唐草文軒平瓦である。土坑380から出土。瓦当部凹面は糸切り後布目、凸面はタテナデ、平瓦部凸面に「七」のヘラ記号が施される。胎土は密で、径7mm大の礫、径2mm以下の長石・石英・チャート・雲母を含む。山城産、平安時代後期。

瓦17は唐草文軒平瓦である。第2面整地層から出土。唐草文の主葉が大きく反転し、支葉は強く巻き込む。瓦当部凹面布目、凸面タテナデ。胎土は密で、径4mm以下の長石・石英・チャートを含む。山城産、平安時代後期。

瓦18は斜格子文軒平瓦である。第2面整地層から出土。斜格子文は凸線である。瓦当部凹面は布目、凸面はタテケズリ。胎土は密で、径4mm以下の長石・石英・チャート・雲母を含む。山城産、平安時代後期。

瓦19は雁巴文軒平瓦である。土坑333から出土。雁行文が連続し、中心に右巻三巴文を配す。巴文の頭部と尾部は互いに接しない。瓦当部凹面は糸切り後布目、凸面はタテケズリ。胎土は密で、径0.5mm以下の長石・石英を含む。山城産、平安時代後期。

瓦20は雁巴文軒平瓦である。土坑259から出土。中心の巴文は左巻三巴文で、雁行文、左巻き二巴文を配する。巴文の頭部と尾部は互いに接しない。瓦当部凹面は糸切り後布目、凸面はヨコナデ。側面上部を面取りする。山城産、平安時代後期。

瓦21は唐草文軒平瓦である。井戸43から出土。中心付近に下向きC字、唐草文の各单位は離れ、界線から派生する。主葉・支葉は強く巻き込む。瓦当部凹面はヨコナデ後タテナデ、凸面タテナデ。胎土は密で、径3mm以下の長石・石英・チャートを含む。播磨産、平安時代後期。

瓦22は唐草文軒平瓦である。攪乱から出土。唐草文が左に展開する。外区には珠文が巡る。瓦当

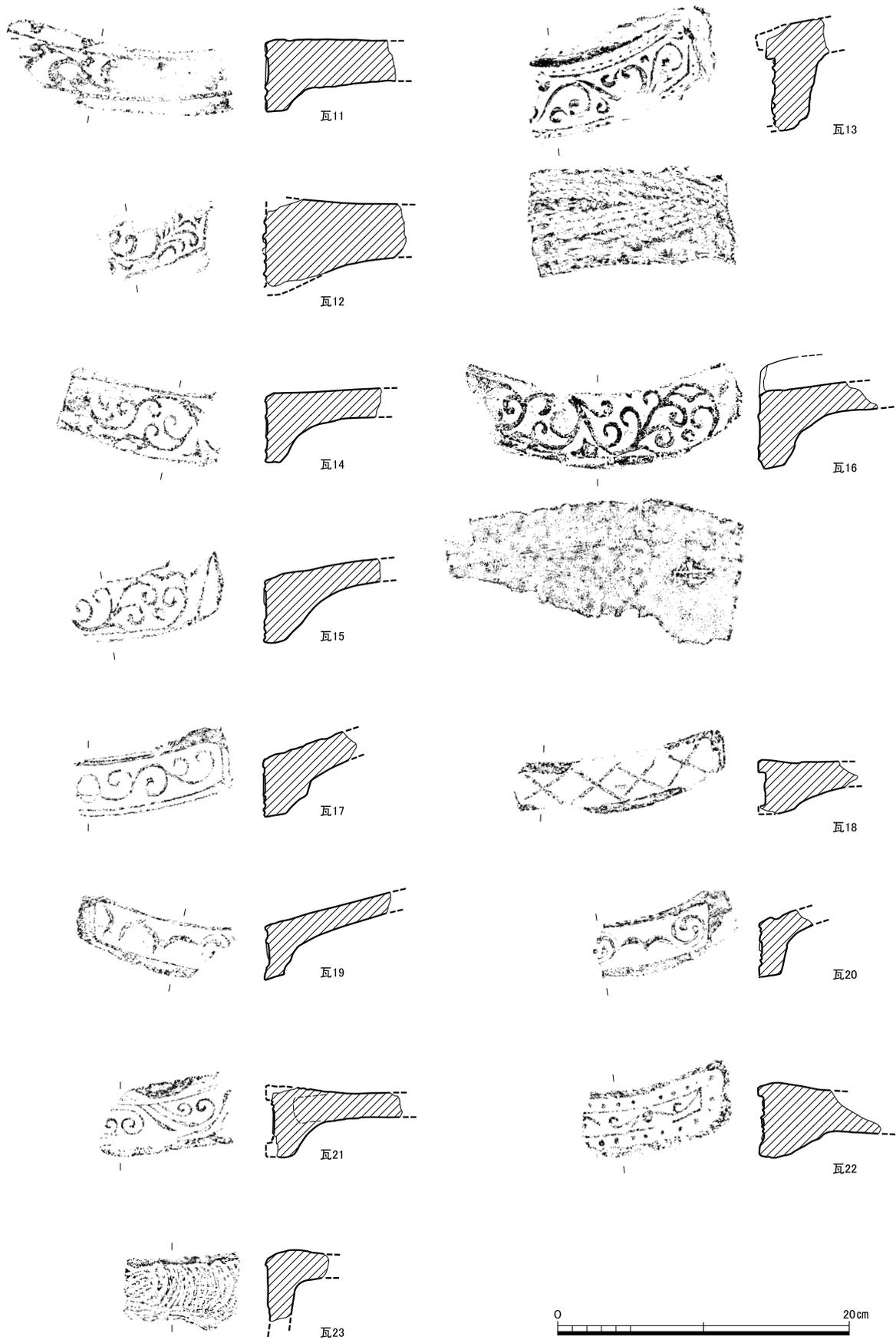


図21 軒平瓦・その他の瓦拓影及び実測図（1：4）

部凹面は布目、凸面はナデ。胎土は密で、径6mm大の礫、径3mm以下の長石・石英・チャートを含む。播磨産、平安時代後期。

その他の瓦 (瓦23)

瓦23は第4面整地層から出土。平坦面に同心円状のタタキを連続して行う。屈曲部の凹面はヨコナデ、凸面はタテナデ。胎土は密で、径1mm以下の長石・石英・チャートを含む。

(4) 金属製品 (図22・23、図版20)

金属製品には、鉄製品9点(金1～8・14)、銅製品5点(金9～13)、銭貨(銭1～23)がある。

金1～8は釘である。金1～6は石室2から出土した。金7は井戸301から、金8は溝261から出土した。金8の周りには錆により木質が残存している。

金9は火箸である。頭部を球形に作り、先に向かって細く加工する。断面は円形である。長さ17.1cm。石室2から出土。

金10は簪である。頭部に耳かきが付く。飾り板の表裏面に魚々子打ちの草花文が施される。金鍍

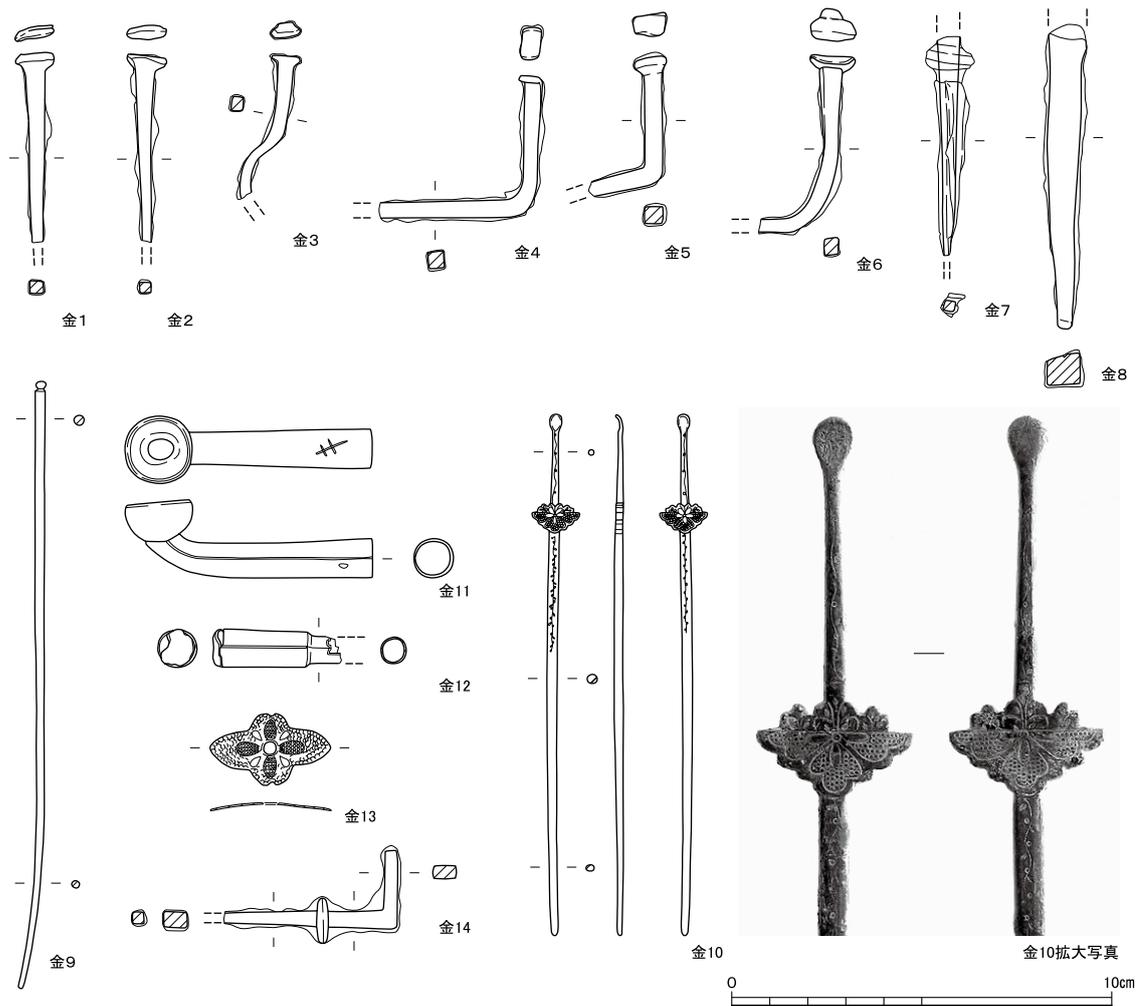


図22 金属製品実測図 (1:2)

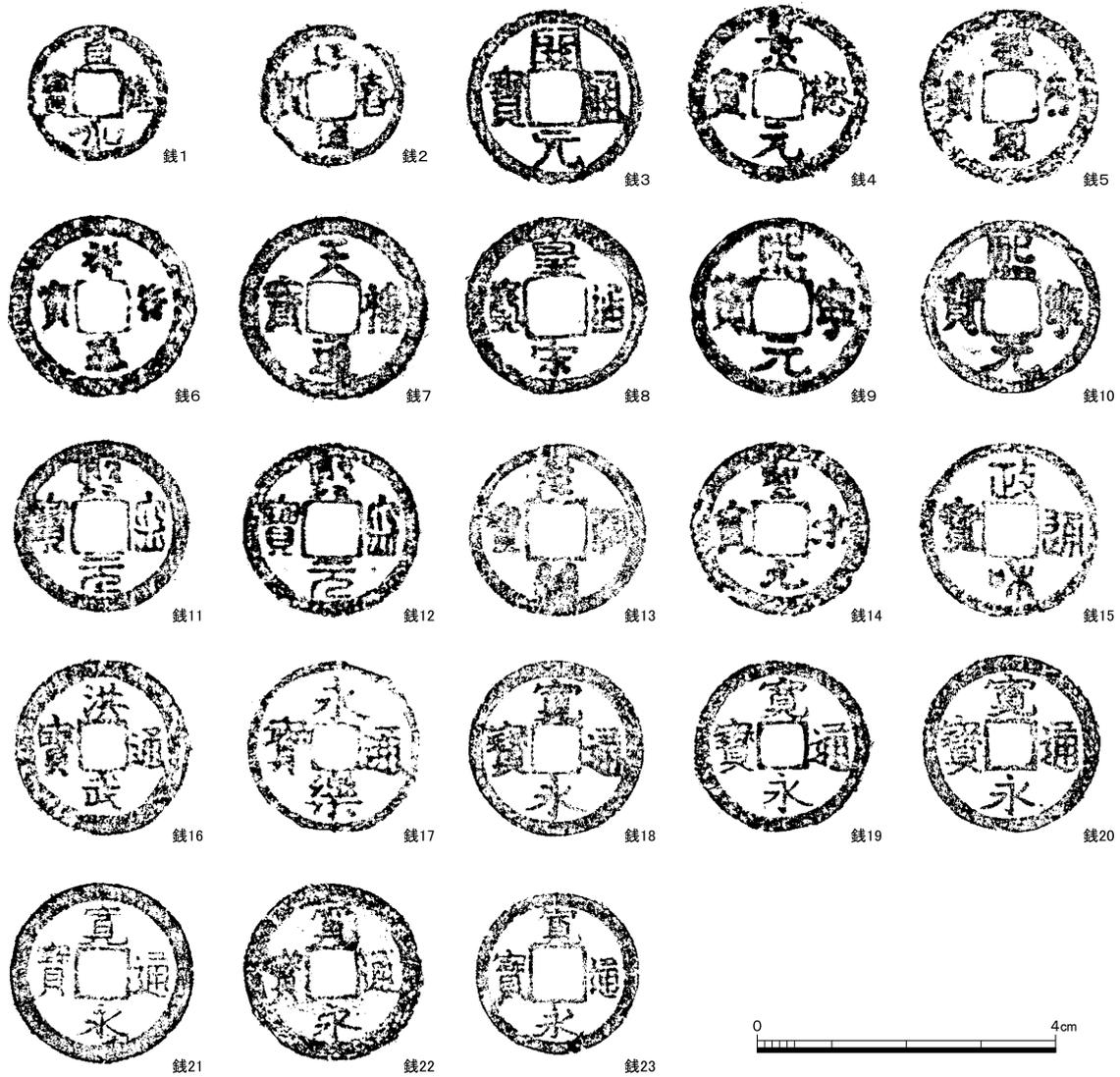


図23 錢貨拓影 (1 : 1)

表4 錢貨一覽表

番号	種類	径 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	初鑄年	出土遺構	番号	種類	径 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	初鑄年	出土遺構
錢1	貞觀永寶	1.9	0.1	1.8	870	堀108	錢13	元祐通寶(篆)	2.4	0.1	3.5	1086	井戸284
錢2	延喜通寶	2.0	0.1	2.6	907	土坑210	錢14	聖宋元寶	2.4	0.1	3.0	1101	集石土坑15
錢3	開元通寶	2.5	0.1	2.5	960	第1面包含層	錢15	政和通寶	2.5	0.1	3.2	1111	第1面包含層
錢4	景德元寶	2.5	0.1	3.1	1004	近代井戸	錢16	洪武通寶	2.4	0.1	3.4	1368	堀108
錢5	祥符通寶	2.5	0.1	3.0	1009	第1面包含層	錢17	永樂通寶	2.4	0.1	2.8	1408	第1面包含層
錢6	祥符通寶	2.6	0.1	3.4	1009	土坑193	錢18	寬永通寶	2.4	0.1	3.7	1636	第1面包含層
錢7	天禧通寶	2.6	0.1	3.1	1017	第1面包含層	錢19	寬永通寶	2.4	0.1	2.7	1636	石室2
錢8	皇宗通寶	2.5	0.1	2.8	1038	第1面包含層	錢20	寬永通寶	2.5	0.1	3.5	1636	井戸63
錢9	熙寧元寶	2.5	0.1	3.1	1068	井戸95	錢21	新寬永通寶	2.5	0.1	3.3	1636	石室2
錢10	熙寧元寶	2.4	0.1	2.8	1068	第1面包含層	錢22	新寬永通寶	2.5	0.1	3.1	1636	井戸55
錢11	熙寧元寶(篆)	2.4	0.1	3.0	1068	第1面包含層	錢23	新寬永通寶	2.3	0.1	2.8	1697	石室2
錢12	熙寧元寶(篆)	2.4	0.1	3.3	1068	第1面包含層							

金がわずかに残る。長さ13.8cm。土坑42から出土。

金11は煙管の雁首部分である。羅字との接合部分近くに「キ」と刻まれる。長さ6.5cm、火皿の口径は1.8cm。井戸43から出土。

金12は煙管の吸口部分である。口元は欠損している。残存長3.3cm。井戸284から出土。

金13は飾り金具である。表面に魚々子打ちの文様が施される。金鍍金がわずかに残る。縦1.9cm、横3.2cm。土坑119から出土。

金14は掛金具である。石室2から出土。

銭貨は34枚出土した。そのうち種類が判明したものは、32枚16種類である。その中で比較的状态の良いもの23枚を図化した(図22)。いずれも裏面は無文である。詳細は表4に記載する。

(5) 土製品 (図24、図版20)

土製品には、伏見人形(土1~5)、埴塙(土6)がある。

土1は人形の頭である。表現は細部にわたり、作りも丁寧である。後頭部から頭頂部にかけて一部欠損する。

土2は牛の脚部である。

土3は猿である。頭部が欠損している。瓦質。

土4は人物像である。頭部が欠損している。

土5は人物像である。一部赤色の顔料と白色の胡粉が残存している。頭部と右手に持っていたものを欠損している。

土1~3は石室2から、土4・5は石室1から出土した。江戸時代末期。

土6は、地下室5の壁材として使用された埴塙である。口径15.4cm、最大径21.0cm、器高32.1cmである。胴部に丸みを持つ直口壺形である。胴部中位には直径3cm程の穿孔が2箇所に分けられる。

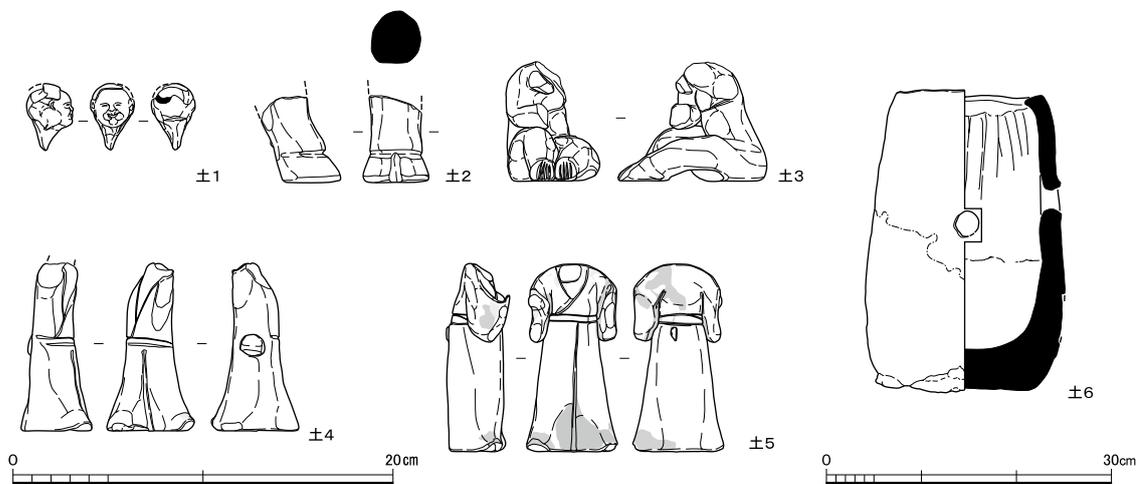


図24 土製品実測図(1:4、6のみ1:8)

5. まとめ

今回、平安京左京四条四坊一町の東端部にあたる場所で調査を行った。調査区の北半分が、近現代の攪乱により削平を受け失われていたが、調査区の東端の高倉小路西築地心推定位置にあたる部分は、遺構が良好に残存しており、特に高倉小路に関しては、平安時代から江戸時代までの遺構の変遷を知る資料を得ることができた。

すなわち、平安時代中期の高倉小路の西側溝と、これにともなう堀と門、側溝埋没後の平安時代後期の堀と門、室町時代の堀と門を検出したことで、平安時代から室町時代まで高倉小路がその位置をほとんど変えずに存在していたことが明らかとなった。ただ、室町時代後期の下京惣構の堀の一部を同位置で検出したことから、一時期は高倉小路の一部が堀となっていたとみられる。堀の埋没後、再び高倉小路として機能するようになったと考えられる。

(1) 高倉小路西側溝の変遷

今回の調査で検出した溝261は、検出した位置から高倉小路の西側溝だと考えられる。側溝の東肩は堀108により失われていたが、西半及び底部は確認することができた。調査区北部では、この溝から11世紀中頃の土師器片が出土した。また、側溝の西側では平安時代後期と室町時代前期の2時期の門を、ほぼ同位置で検出しており、室町時代でも平安時代の門の位置を踏襲していたことがわかった。室町時代の高倉小路西側溝は、検出していないが後述する堀108の掘削により失われている。

室町時代後期から安土桃山時代の堀108を溝261とほぼ同位置で検出した。検出した範囲は西肩部のみであったが、幅2m以上、深さ1.5m以上である。底部及び東肩部に関しては調査区外となり堀全体の幅は不明である。高橋康夫氏は、戦国期の京都の復元を行う段階で、上京・下京がそれぞれ別の惣構により囲まれており、下京惣構の東限が高倉通に位置するとしている¹⁾。今回検出した堀108は、その規模から通常の道路側溝とは考えづらく、位置や時期から下京惣構の堀と考えられる。惣構の堀に関しては不明瞭な点が多く、今回その位置を確定できたことは大きな成果である。

過去の調査における下京惣構の堀の検出例は、1992年度に行われた平安京左京五条四坊二町跡²⁾と左京四条二坊十四町跡³⁾の調査がある。前者の堀は、検出した肩幅約6.9m、底部幅約4.6m、深さ2.0m以上あり、本来の堀の肩幅は8.0mと推測されている。堀が機能していた時期は、室町時代後期から末期であり、安土桃山時代には埋め戻された⁴⁾。後者の堀は、東西方向の堀の北肩と底部を検出しており、堀の推定肩幅4m以上、深さ1.3～1.4mである。埋土からは安土桃山時代の土師器が少数出土している。

今回検出した堀も、1992年度調査で検出したものと同程度の規模と考えるならば、室町時代後期から安土桃山時代にかけて高倉通は、大部分が下京惣構の堀であった可能性が考えられる。このことは『京都坊目誌』に、高倉通に関して「文明以来荒廢して天正中再開する所なり」とあり、文献資料とも合致する。また、この堀は上層に拳大の礫を混ぜ、突き固めながら埋めていることから、

高倉通と宅地との境界付近の沈下を防ぐための地盤改良を行っていたと考えられる。江戸時代前期には、塀2を平安時代や室町時代の塀とほぼ同位置に検出し、高倉小路が再び機能を取り戻したと考えられる。一方、江戸時代の高倉小路西側溝は、今回の調査で確認しておらず、調査区外に位置するものと思われる。また、江戸時代末期の石室1の存在から、この時期までには、高倉通の西端が東へ移動し、現在の幅まで縮小したと考えられる。

(2) 門遺構について

今回の調査では、平安時代後期と室町時代前期の高倉小路に開く門1～3を検出した(図25)。平安時代の門と塀をセットで検出した例はほとんどない。これは、現在の京都の道路と平安京の条坊の道路の位置が重なっていることが多く、調査対象地外であることが多いことも一因である。これまで、平安京における平安時代の道路に開く門では、前期に4例、中期に4例、後期に3例の調査がある(表5参照)。これらの門のうち今回検出した門2・3と同時期である後期の右京三条一坊四町(表5-調査10)や右京六条一坊三町(調査11)の門と今回検出した門とを比べると、いずれも構造が棟門という点は変わらないが、前者は間口約3.6m(12尺)、後者は間口約4.4m(約15尺)あるのに対して、今回検出した門2・3は、2基とも間口約1.8m(6尺)と狭く規模が小さいことがわかる。調査10・11ともに同時期である平安時代後期の遺構がほとんど検出されていないため、宅地規模などは不明であり、断定はできないが、門2・3は宅地の正門ではなく裏門であった可能性が考えられる。

一方で、室町時代の宅地の門に関して、これまでの調査例で確認されたものは平安時代のものよりさらに少ない(同表5参照)。今回の調査で検出した門1は、親柱のみの棟門で間口は約2.4m(8尺)で地下式礎石を有する。さらに門の東側には基壇の縁石と考えられる石列が並ぶ。過去の調査例のうち規模が判明している北野遺跡の門と比較すると、北野遺跡の門は規模が間口約2.2m、

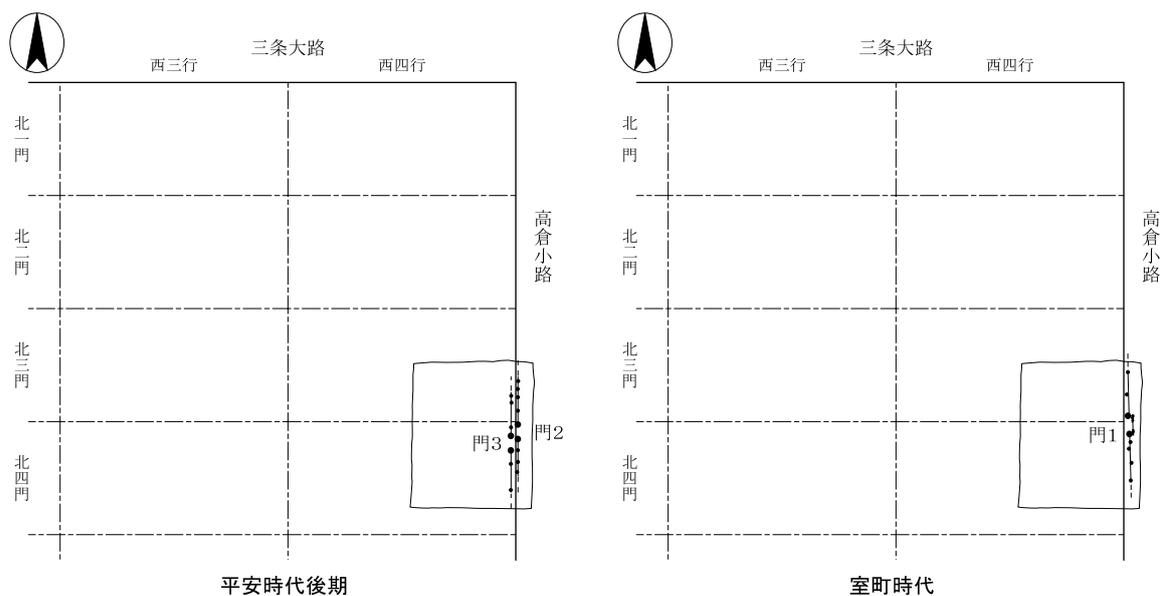


図25 平安時代後期と室町時代の門と塀 (1 : 1,000)

表5 平安時代と室町時代の門一覧表

番号	時代	遺跡	構造	間口柱間	掘形規模	開く道路	文献
1	平安時代前期	右京一条三坊九町	四脚門	4.5m	—	鷹司小路	1
2	〃	右京四条二坊十三町 (淳和院推定地)	棟門	3.7m	—	道祖大路	2
3	〃	右京五条三坊六町	棟門	3.8m	一辺 約0.6m	高辻小路	3
4	〃	右京六条一坊十四町	棟門	3.9m	0.7~0.9m	楊梅小路	4
5	平安時代中期	右京二条二坊五町	棟門	3.5m	—	二条大路	5
6	〃	右京三条二坊十六町 (斎王邸または野宮推定地)	棟門、または 四脚門	5.4m	一辺0.7 ~0.8m	野寺小路	6
7	〃	左京三条三坊十一町	—	3.2m	一辺1.1 ~1.2m	烏丸小路	7
8	〃	右京六条一坊四町	棟門	4.7m	一辺0.9m	楊梅小路	8
9	平安時代後期	法金剛院東限	—	東西2.2m、南北1.8mの 地業を検出		西京極大路と中御門 大路の交差点	9
10	〃	右京三条一坊四町	棟門	3.6m	径0.45 ~0.5m	朱雀大路	10
11	〃	右京六条一坊三町	棟門か	4.4m	径0.6 ~1.0m	楊梅小路	11
12	室町時代	左京三条四坊十三町	—	—	—	三条大路	12
13	〃	北野遺跡	四脚門、 または棟門	約2.2m	—		13

文献

- 1) 村田和弘「平安京跡右京一条三坊九・十町(第8・9次)発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報 第92冊』財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター 2000年
- 2) 吉川義彦『淳和院跡発掘調査報告 平安京右京四条二坊』関西文化財調査会 1997年
- 3) 津々池惣一『平安京右京五条三坊六町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2010-20 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2011年
- 4) 南 孝雄・モンペティ恭代『平安京右京六条一坊十四町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2008-22 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2009年
- 5) 東 洋一・網 伸也・真喜志悦子「平安京右京二条二坊」『平成7年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1997年
- 6) 鈴木廣司・網 伸也ほか『平安京右京三条二坊十五・十六町 —「齋宮」の邸宅跡—』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第21冊 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2002年
- 7) 寺島孝一ほか『平安京左京三条三坊十一町』平安京跡研究調査報告第14輯 財団法人古代学協会 1984年
- 8) 「右京六条一坊三・四町跡」『昭和53年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2011年
- 9) 小松武彦・吉村正親・小檜山一良「平安京右京一条四坊・法金剛院境内」『平成8年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1998年
- 10) 網 伸也・山口 眞『平安京右京三条一坊四町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2004-16 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2005年
- 11) 布川豊治・鈴木廣司・南 孝雄『平安京右京六条一坊三町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2008-7 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2008年
- 12) 堀内明博「平安京左京三条四坊」『昭和62年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1991年
- 13) 柏田有香「北野廃寺17次調査」『京都市内遺跡発掘調査報告 平成22年度』京都市文化市民局 2010年

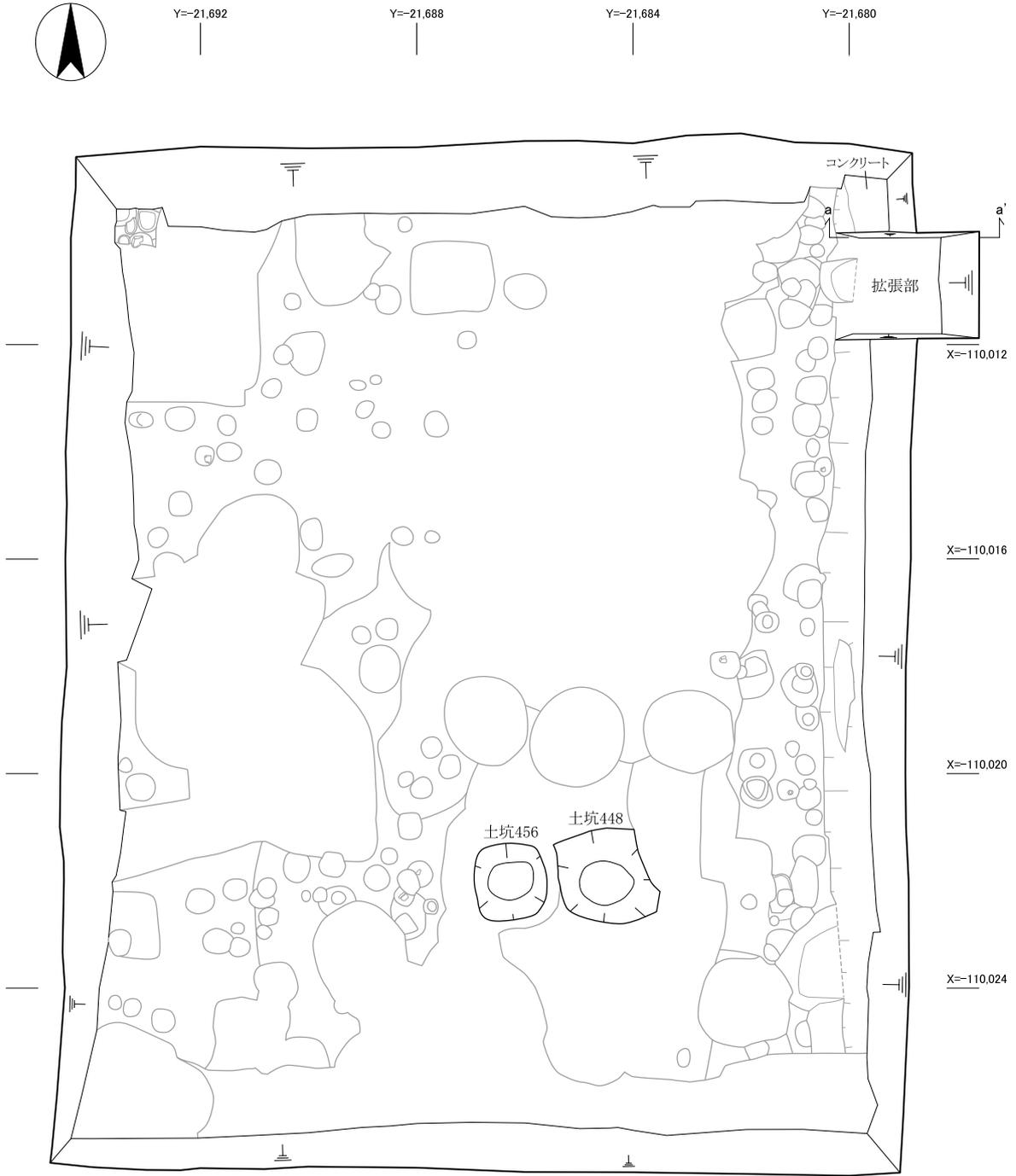
構造は地下式礎石を有し、四脚門もしくは親柱の前後に控柱をもつ棟門であり、構造は控柱の有無など異なる点があるが、地下式礎石を有する点や規模など類似する要素もみられる。ただし門の性格については、検出例が少なく判断できない。

以上、当地においては平安時代後期から室町時代まで高倉小路に沿って塀と門が存在し、その間継続して宅地として利用されていたことがわかる。室町時代後期からは下京惣構の堀により、それまでの様相とは一変する。上述したように、高倉通は通路としての機能を失っており、出入りができなくなり、そして安土桃山時代に再び堀が埋め戻され、高倉小路として機能が回復し、再び塀の内側に宅地が開くようになったと考えられる。

註

- 1) 高橋康夫『京都中世都市研究』 思文閣出版 1983年
- 2) 長戸満男・山本雅和・近藤知子・鈴木廣司「平安京左京五条四坊」『平成4年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1992年
- 3) 平尾政幸・藤村敏之・山口 真『平安京左京四条二坊十四町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2003-5 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2003年
- 4) 註3に同じ。
- 5) 『新修京都叢書』第17巻 臨川書店 1976年 226頁

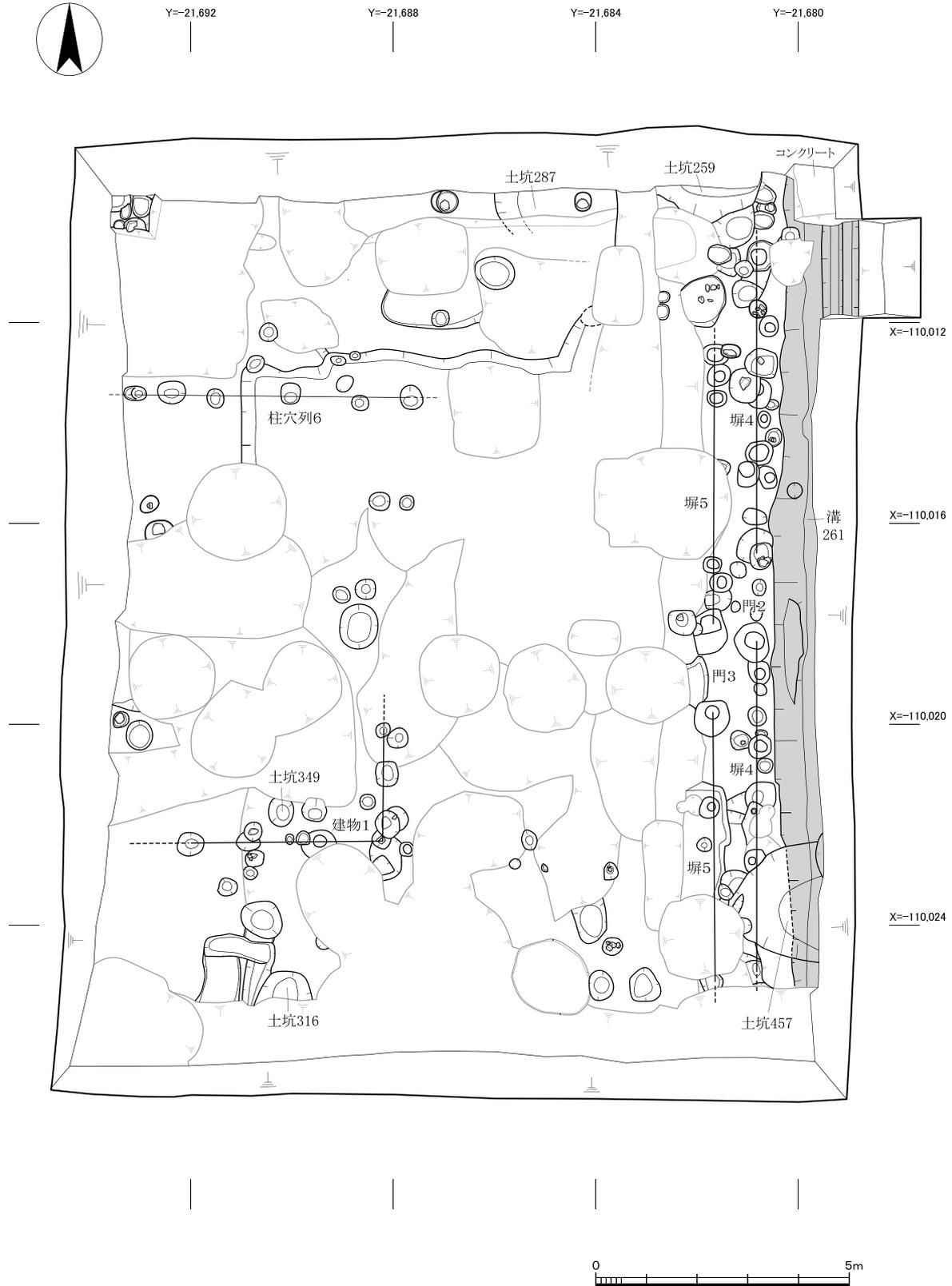
圖 版



※ a-a'は拡張部北壁断面(図11)の位置を示す。



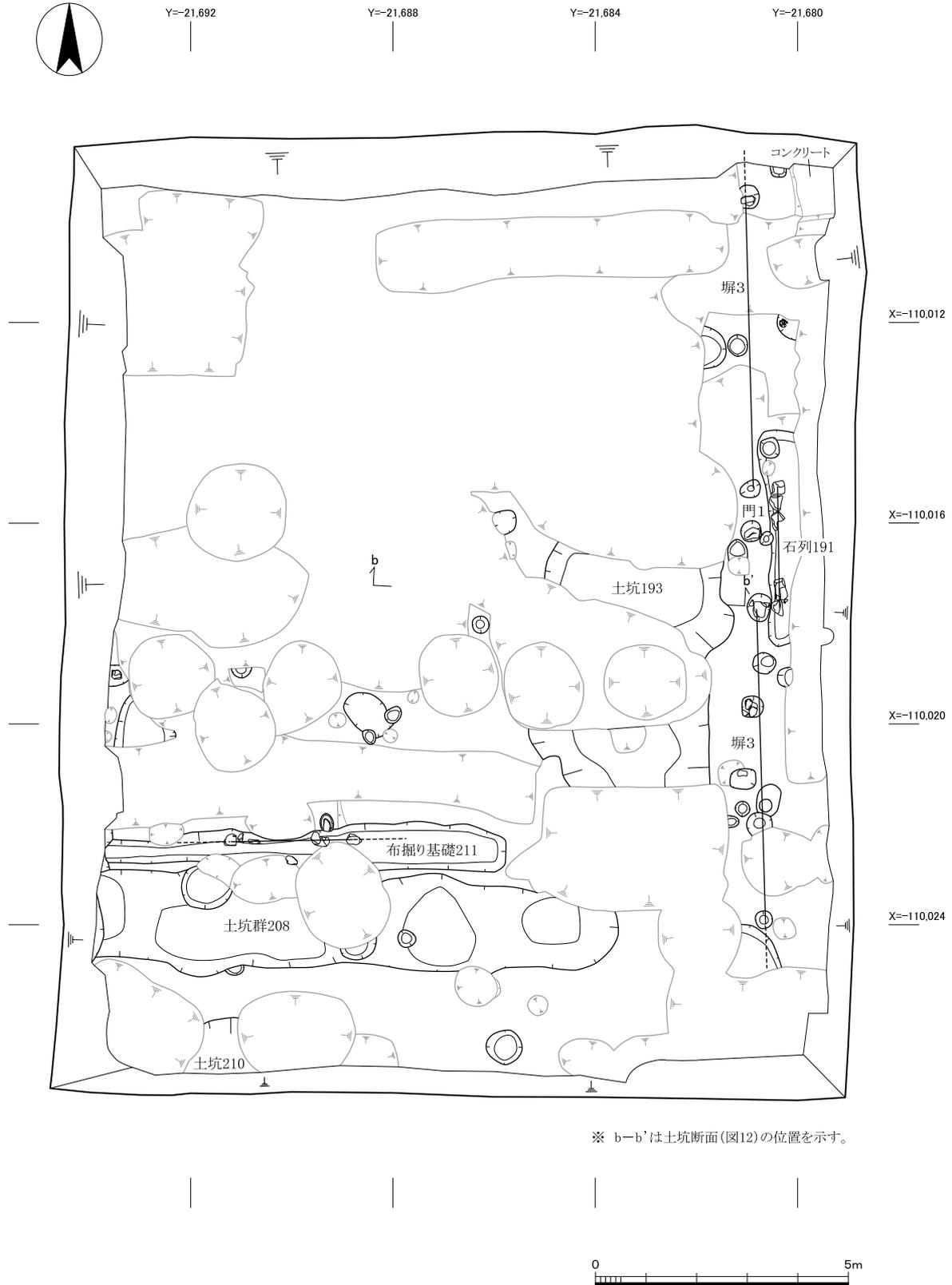
第5面遺構平面図 (平安時代中期、1 : 120)



第4面遺構平面図（平安時代後期、1 : 120）

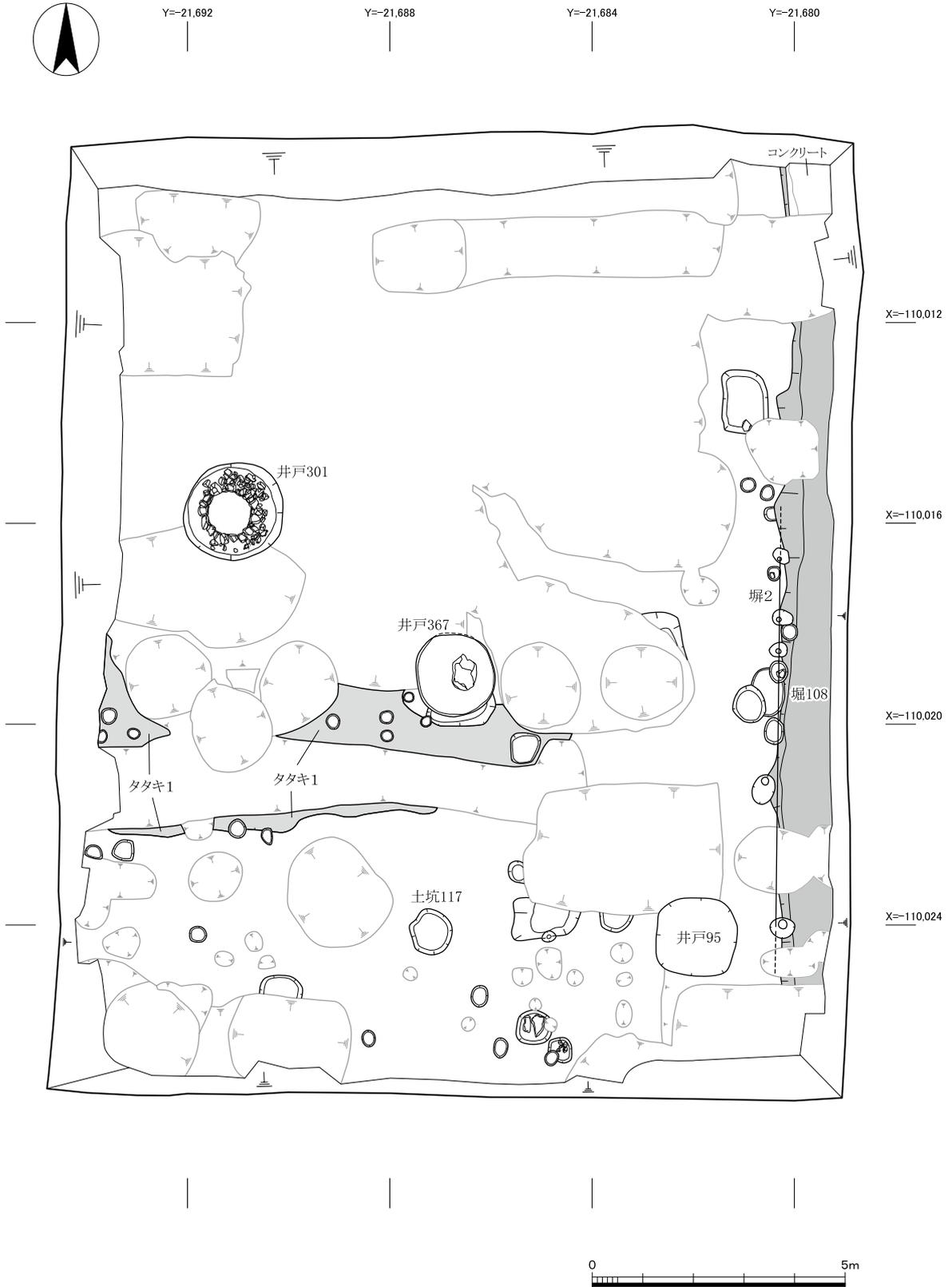


第3-2面遺構平面図（鎌倉時代から室町時代、1:120）

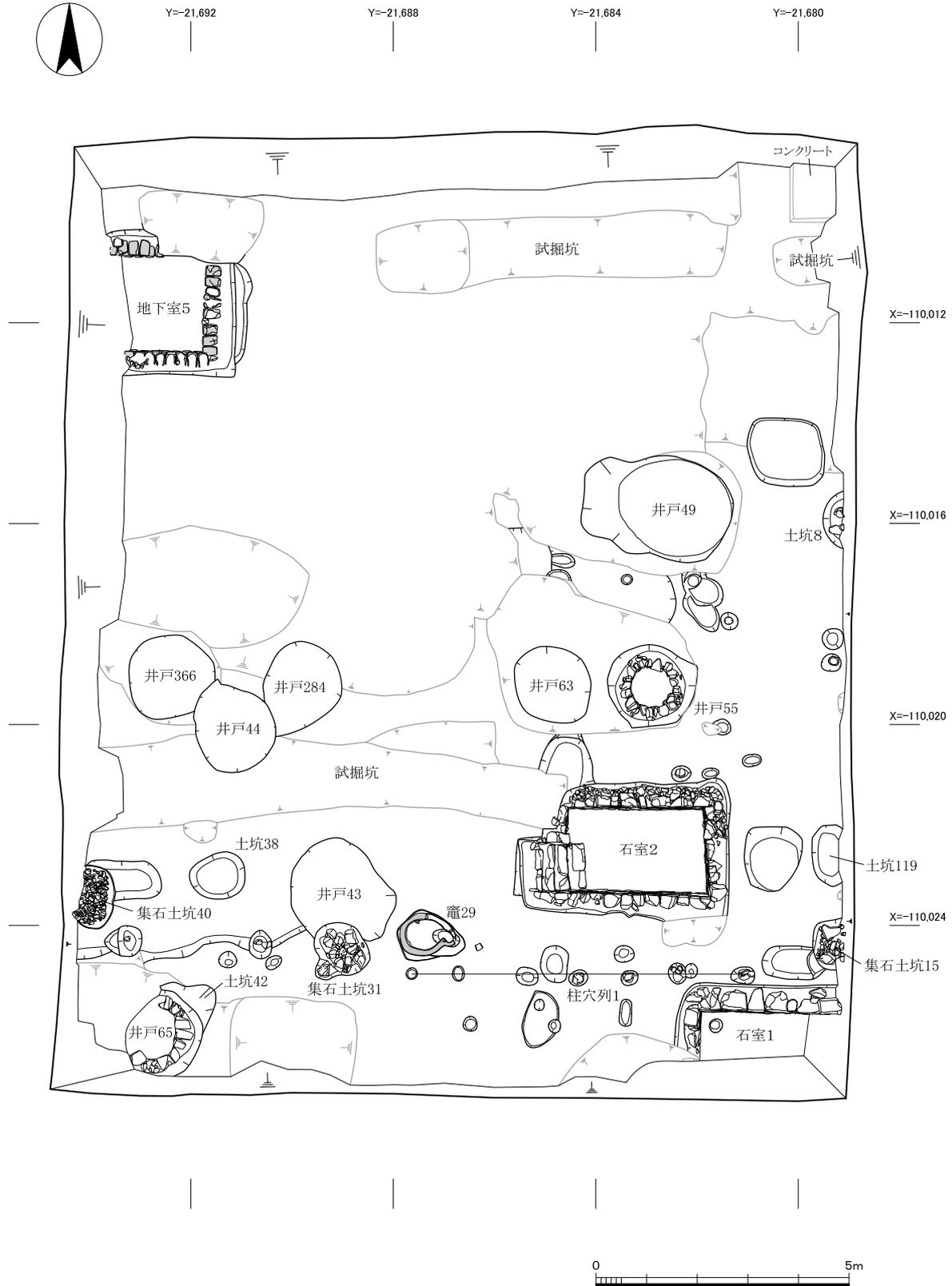


※ b-b'は土坑断面(図12)の位置を示す。

第3-1面遺構平面図(室町時代、1:120)

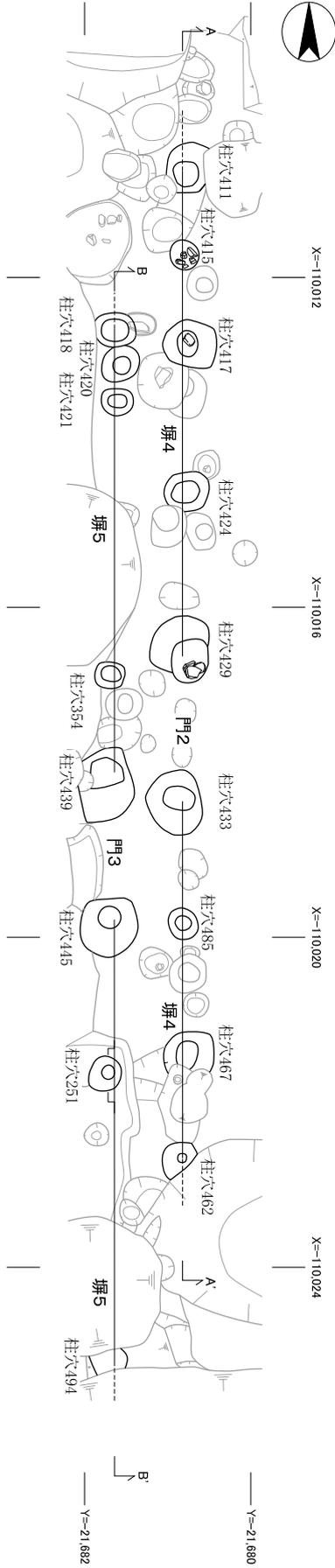


第2面遺構平面図（室町時代後期から江戸時代前期、1 : 120）

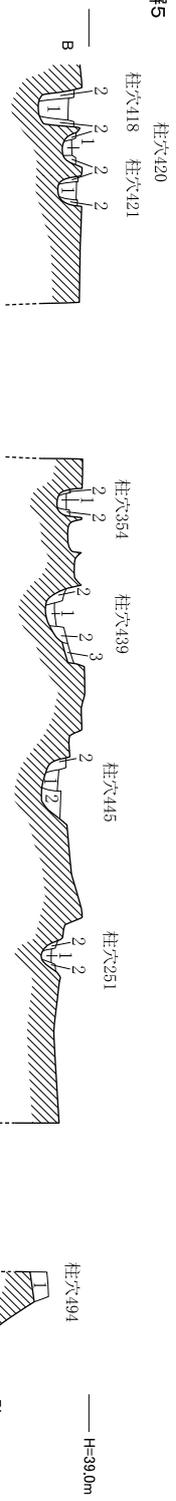


第1面遺構平面図（江戸時代中期から末期、1 : 120）

図版7 遺構



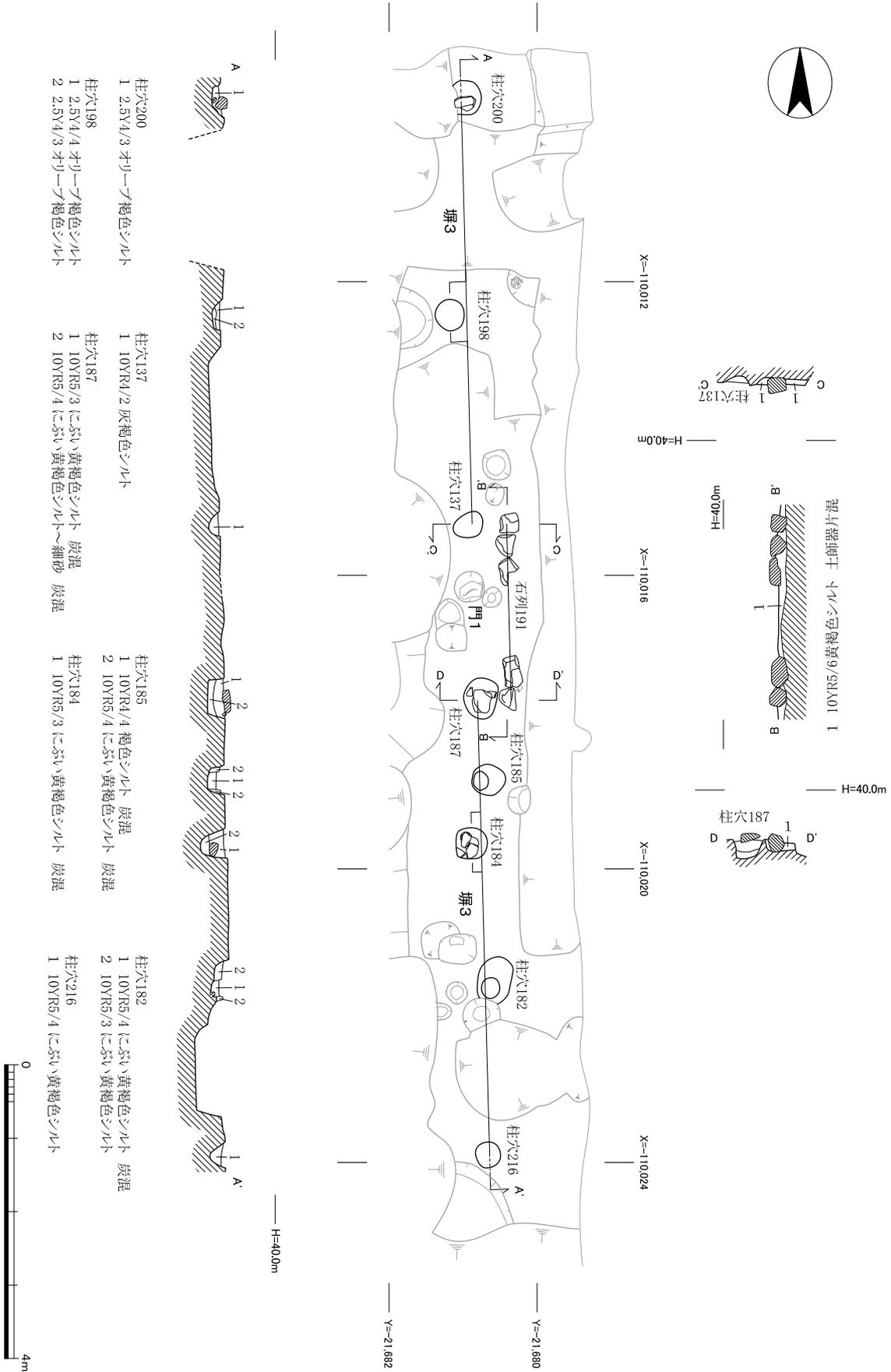
- | | |
|--|--|
| <p>堀4</p> <p>柱穴411</p> <p>柱穴415</p> <p>柱穴417</p> <p>柱穴424</p> <p>柱穴429</p> <p>柱穴433</p> <p>柱穴485</p> <p>柱穴467</p> <p>柱穴462</p> | <p>柱穴411</p> <p>1 2.5Y4/4オリーブ褐色シルト 炭混</p> <p>2 2.5Y5/3黄褐色シルト 土師器片・炭混</p> <p>柱穴415</p> <p>1 2.5Y4/4オリーブ褐色シルト</p> <p>2 2.5Y4/3オリーブ褐色シルト</p> <p>柱穴417</p> <p>1 2.5Y4/3オリーブ褐色シルト</p> <p>2 2.5Y4/4オリーブ褐色シルト</p> <p>柱穴424</p> <p>1 2.5Y4/4オリーブ褐色シルト</p> <p>2 2.5Y4/3オリーブ褐色シルト</p> <p>柱穴429</p> <p>1 2.5Y4/4オリーブ褐色シルト～細砂</p> <p>2 2.5Y5/3黄褐色シルト</p> <p>3 2.5Y4/3オリーブ褐色シルト 炭混</p> <p>柱穴433</p> <p>1 2.5Y3/3暗オリーブ褐色シルト 土師器片・炭混</p> <p>2 2.5Y4/3オリーブ褐色シルト 土師器片・炭混</p> <p>柱穴485</p> <p>1 2.5Y4/2暗黄褐色シルト 土師器片・炭混</p> <p>2 2.5Y4/4オリーブ褐色シルト 土師器片・炭混</p> <p>柱穴467</p> <p>1 2.5Y4/2暗黄褐色シルト 土師器片・炭混</p> <p>2 2.5Y4/4オリーブ褐色シルト 土師器片・炭混</p> <p>柱穴462</p> <p>1 2.5Y4/4オリーブ褐色シルト</p> <p>2 2.5Y4/3オリーブ褐色シルト</p> |
|--|--|



- | | |
|--|--|
| <p>堀5</p> <p>柱穴420</p> <p>柱穴418</p> <p>柱穴421</p> <p>柱穴421</p> <p>柱穴354</p> <p>柱穴439</p> <p>柱穴445</p> <p>柱穴251</p> <p>柱穴494</p> | <p>柱穴420</p> <p>1 2.5Y4/4オリーブ褐色シルト</p> <p>2 2.5Y4/3オリーブ褐色シルト</p> <p>柱穴418</p> <p>1 10YR4/3にぶい黄褐色シルト</p> <p>2 2.5Y5/3黄褐色シルト</p> <p>柱穴421</p> <p>1 2.5Y4/3オリーブ褐色シルト</p> <p>2 2.5Y4/4オリーブ褐色シルト</p> <p>柱穴354</p> <p>1 2.5Y5/4黄褐色シルト～細砂</p> <p>2 2.5Y4/4オリーブ褐色シルト～細砂</p> <p>柱穴439</p> <p>1 2.5Y6/4にぶい黄色シルト</p> <p>2 2.5Y3/3暗オリーブ褐色シルト～細砂</p> <p>3 2.5Y4/6オリーブ褐色シルト</p> <p>柱穴445</p> <p>1 2.5Y6/4にぶい黄色シルト</p> <p>2 2.5Y5/6黄色シルト</p> <p>柱穴251</p> <p>1 2.5Y4/2暗灰黄色シルト</p> <p>2 2.5Y4/3オリーブ褐色シルト</p> <p>柱穴494</p> <p>1 2.5Y5/3黄褐色シルト</p> |
|--|--|



堀4・5、門2・3実測図 (1:80)



堀3、門1実測図 (1 : 80)

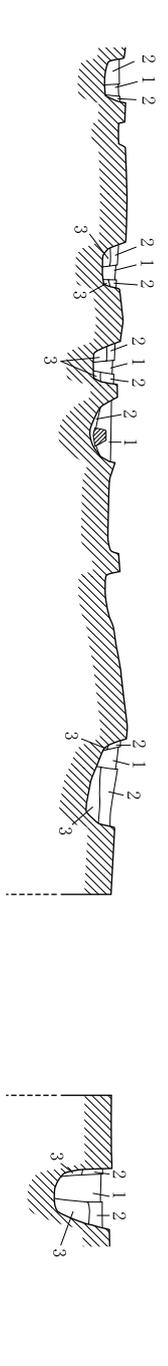
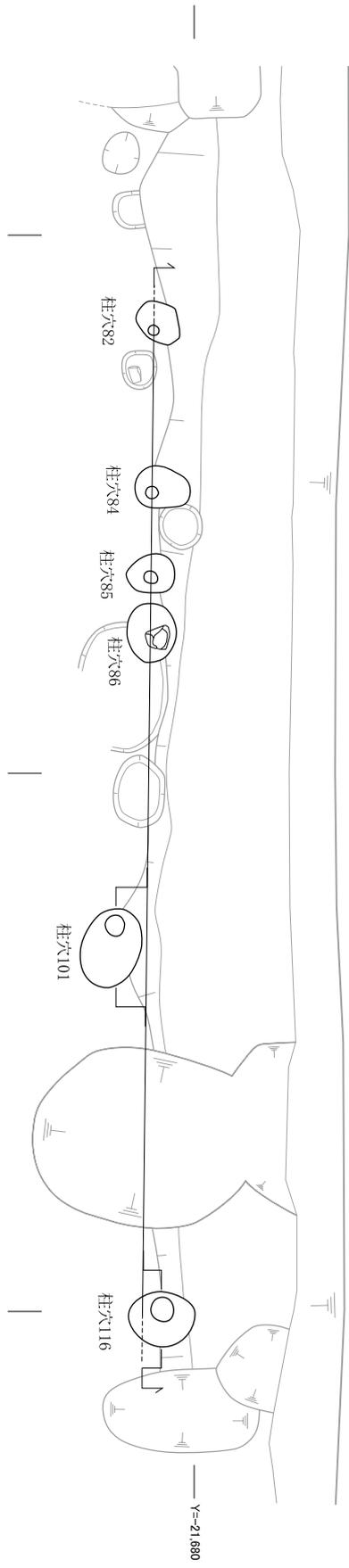
図版9 遺構



X=110016

X=110020

X=110024



- 柱穴82
- 1 10YR5/3にぶい黄褐色シルト
 - 2 10YR5/1褐色シルト～細砂
 - 土師器片埋

- 柱穴85
- 1 10YR5/2灰黄褐色シルト
 - 2 10YR5/3にぶい黄褐色シルト
 - 3 10YR4/3にぶい黄褐色シルト

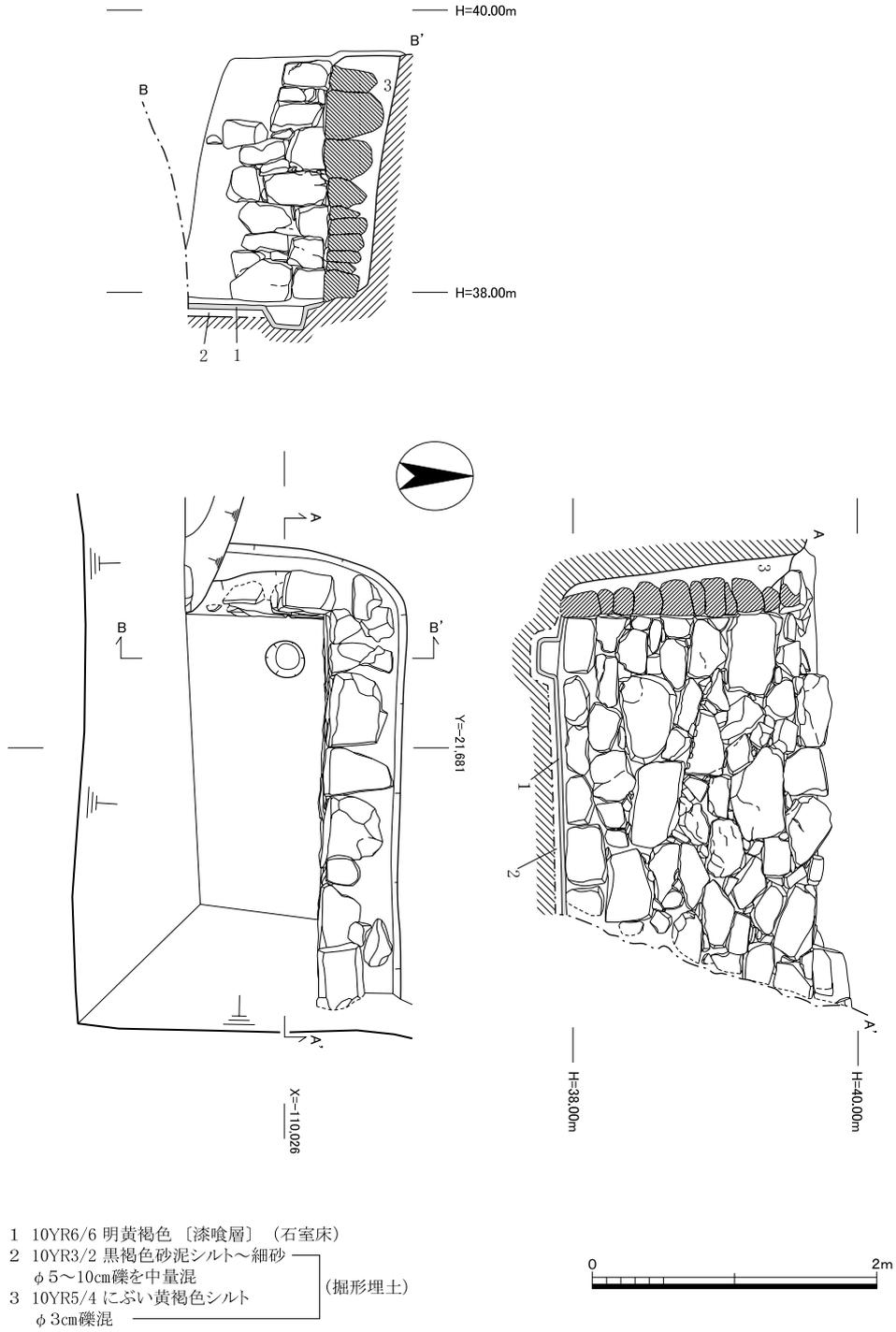
- 柱穴101
- 1 10YR5/2 灰黄褐色シルト～細砂
 - 2 2.5Y4/3オリーブ褐色シルト
 - 3 10YR8/3にぶい黄褐色シルト

- 柱穴116
- 1 10YR4/3にぶい黄褐色シルト
 - 2 10YR4/2灰黄褐色シルト
 - 3 10YR4/4褐色シルト

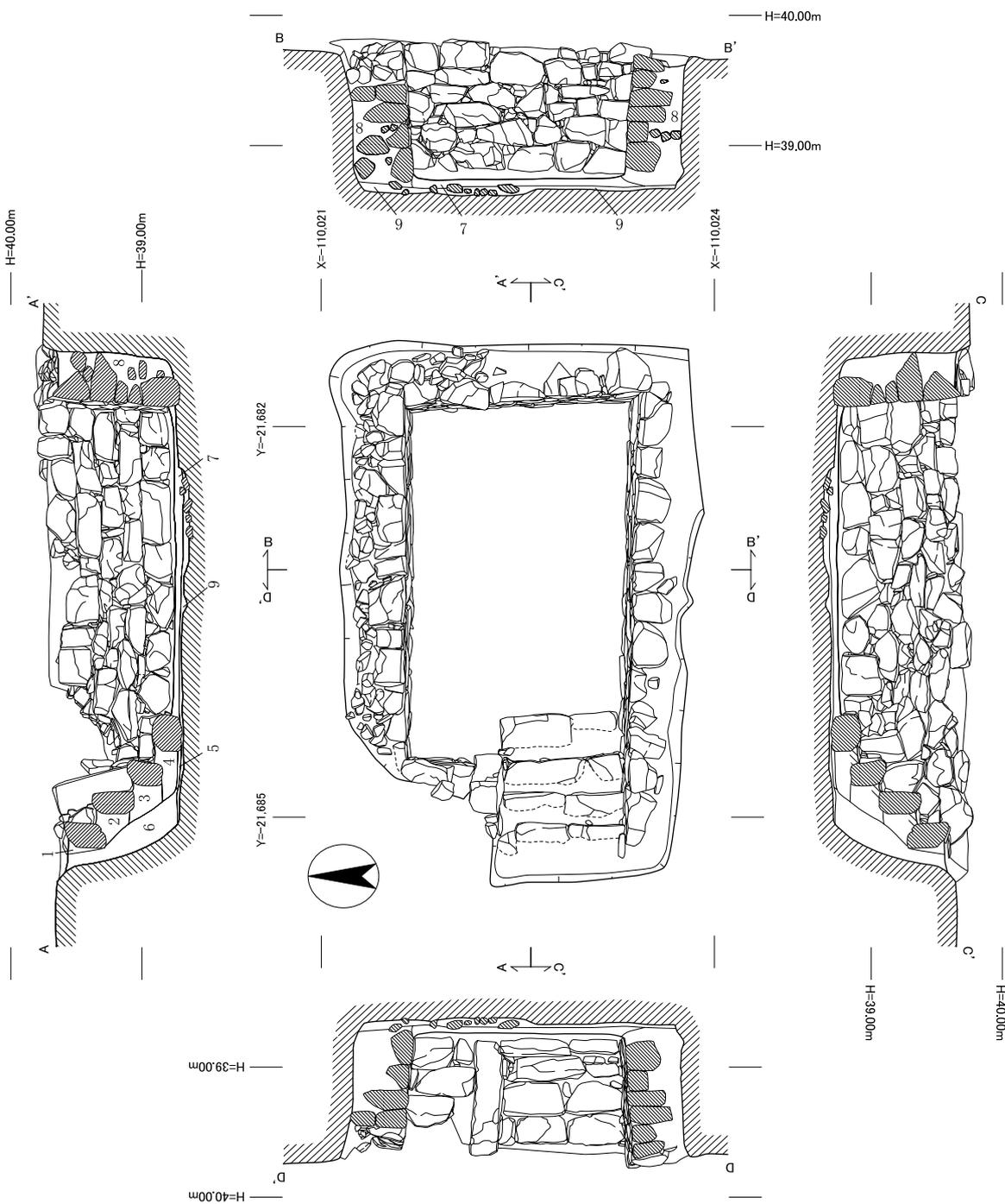
- 柱穴84
- 1 10YR5/2灰黄褐色シルト
 - 2 10YR5/3にぶい黄褐色シルト
 - 3 10YR4/3にぶい黄褐色シルト



塀2実測図 (1 : 50)

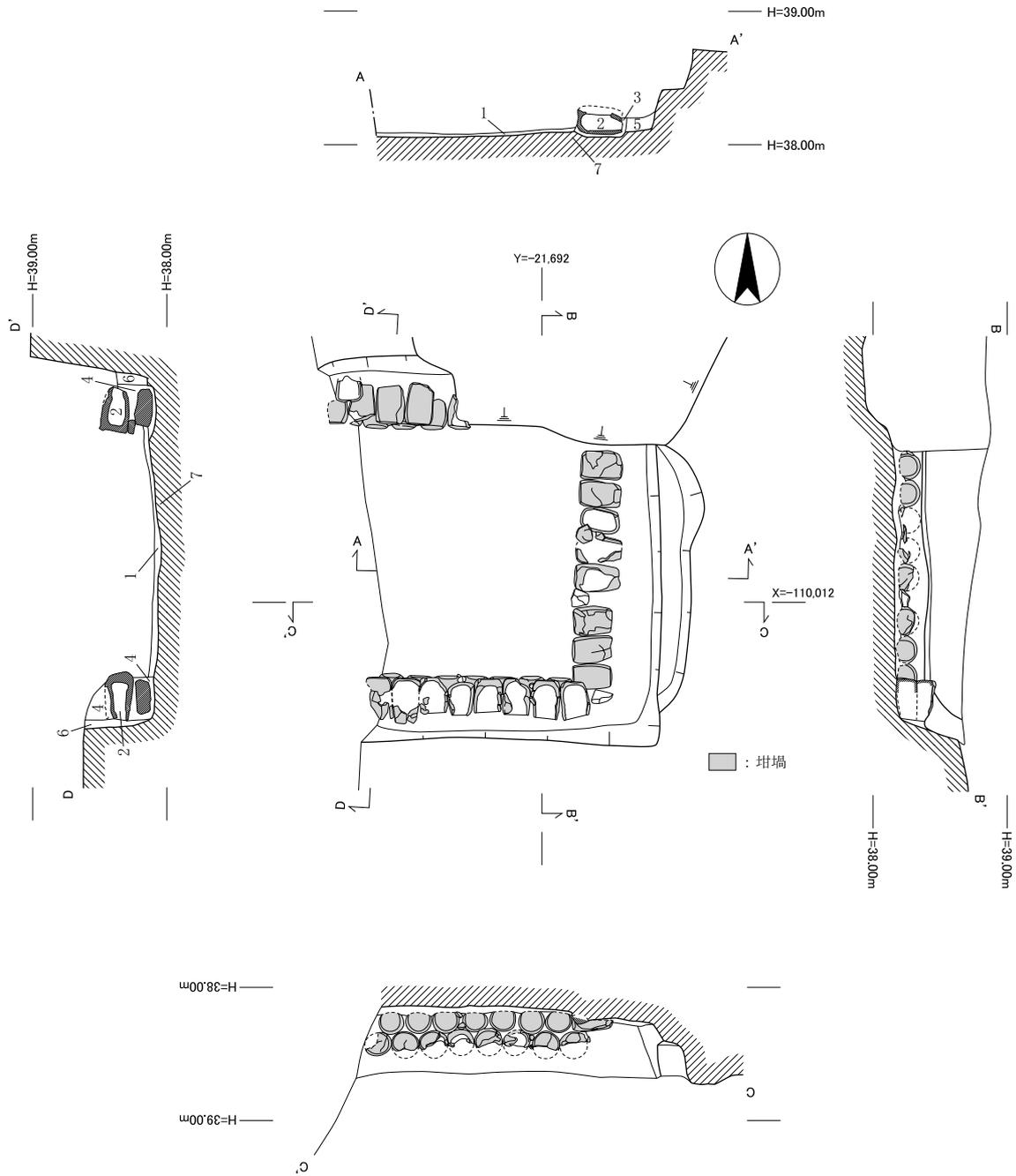


石室1実測図(1:50)



- | | | |
|---|------------------------------------|--------|
| 1 | 10YR4/3 にぶい褐色シルト | (階段掘形) |
| 2 | 10YR4/4 褐色シルト 焼土・炭混 | |
| 3 | 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 炭混 | |
| 4 | 10YR4/4 褐色シルト 焼土・炭混 | |
| 5 | 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト 炭混 | (掘形埋土) |
| 6 | 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト 炭混 | |
| 7 | 10YR5/3 にぶい黄褐色細砂～粗砂 炭混(石室床) | |
| 8 | 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト
φ 3～10cmの礫少量混 | |
| 9 | 2.5Y4/4 オリーブ褐色シルト | |

石室 2 実測図 (1 : 50)



- 1 7.5YR4/2 灰褐色砂泥 固く締まる 土器片・灰、炭中量混 (室床整地層)
- 2 10YR3/2 黒褐色砂泥砂礫混じり 土器片・炭片混 (埴塙内容土)
- 3 10YR4/2 灰黄褐色砂泥 炭・灰多量混
- 4 2.5Y3/2 黒褐色砂泥 炭・灰中量混
- 5 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂泥砂礫混じり 土器片・炭片混 (室掘形)
- 6 2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥 炭、φ3cm位の礫中量混
- 7 10YR4/3 こぶい黄褐色砂泥 φ3~10cmの礫混 (室基盤層 地山)



地下室5実測図 (1 : 50)



1 第5面全景（西から）



2 第4面全景（西から）



1 溝261、堀4・5、門2・3 (北西から)



2 門2・3完掘状況 (北から)



3 溝261土師器片埋没状況 (北から)



4 拡張部北壁(南から)



1 第3面全景（北西から）



2 門1（南東から）



3 布掘り基礎211（西から）



1 第2面全景（北西から）



2 堀108検出状況（南西から）



3 タタキ1（西から）



1 第1面全景（北西から）



2 石室2（東から）



3 地下室5（北から）





瓦2



瓦3



瓦5



瓦6



瓦8



瓦10



瓦16



瓦18



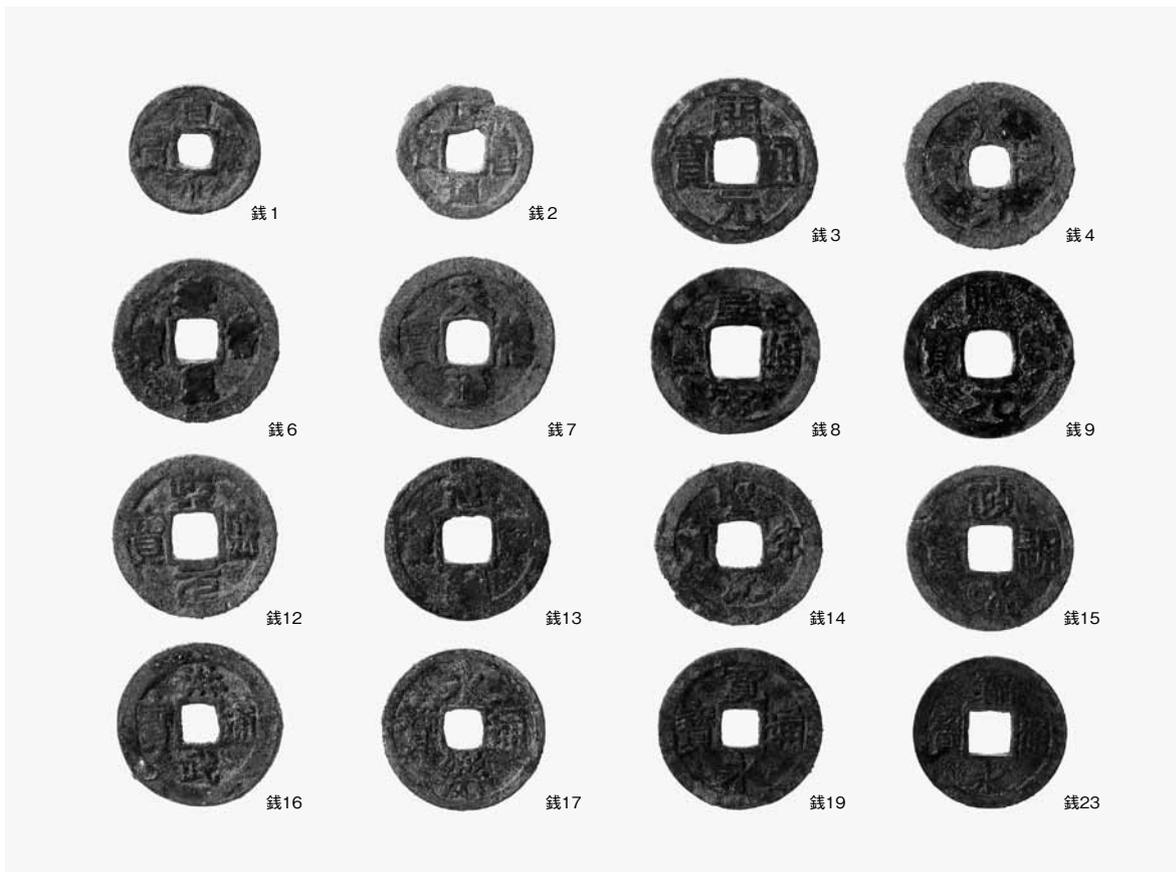
瓦13



瓦21



瓦22



1 出土錢貨



2 出土埴塼



3 溝261出土動物骨

報 告 書 抄 録

ふりがな	へいあんきょうさきょうしじょうしぼういっちょうあと・からすまおいけいせき							
書名	平安京左京四条四坊一町跡・烏丸御池遺跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2019-7							
編著者名	松永修平							
編集機関	公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2020年1月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
へいあんきょうあと 平安京跡 からすまおいけいせき 烏丸御池遺跡	きょうとしなかがきょうく 京都市中京区 たかくらどおりさんじょうさがる 高倉通三条下る まるやちょう 丸屋町163番地 他	26100	1 464	35度 00分 28秒	135度 05分 44秒	2019年3月 4日～2019 年6月1日	294.5㎡	新社屋建 設工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
平安京跡 烏丸御池遺跡	都城跡 集落跡	平安時代 鎌倉時代～ 室町時代 江戸時代	溝、塀、門、建物、 柱穴列、土坑 塀、門、布掘り基 礎、土坑群 石室、地下室、竈、 集石土坑、柱穴列、 井戸	土器類、瓦類、金属製 品 土器類、瓦類、金属製 品 土器類、金属製品、土 製品		平安時代から室町 時代の高倉小路に 開く門を検出した。 平安時代の高倉小 路西側溝、室町時 代後半の下京惣構 の堀を検出した。		

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2019-7

平安京左京四条四坊一町跡・烏丸御池遺跡

発行日 2020年1月31日

編集行 公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
〒602-8435 TEL 075-415-0521
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町298番地
〒604-0093 TEL 075-256-0961